

# 飯田豊一（濡木痴夢男）氏の軌跡とその仕事

——新出インタビュー原稿によせて——

河原梓水

## はじめに

本稿は、2013年に惜しまれつつこの世を去った飯田豊一氏が、2009年から死の直前までに受けた未公開インタビューを活字にし、簡単な注釈を付したものである。そして、インタビューに寄せて、飯田氏の仕事、とりわけ作家として、編集者として、そして「縛り係」としての仕事を中心に、1950年から2013年までの約60年間の軌跡を概観するものである。

飯田氏は、戦後、多作の作家として活躍する傍ら、雑誌編集者としてSM雑誌を中心とする多数の雑誌編集に携わり、さらに1970年代以降は濡木痴夢男（ぬれきちむお）の名で非常に多くのSM雑誌の緊縛グラビア・アダルトビデオで、縛りや演出を担当し活躍した人物である。大の芝居好きとしても知られ、脚本を執筆するのみならず、自ら舞台に立つこともあった。戦後の出版文化に関する回顧録も複数出版しており、SM研究だけでなく、メディア史研究においても極めて貴重な証人として活躍した。筆者も戦後日本のサディズム/マゾヒズム研究を進めるなかで、飯田氏の著作から非常に多くのことを学んだ1人である。

今回掲載するインタビューは、『新青年』研究会員の黒田明氏が、2009年から2013年にかけて実施した、飯田氏への個人的なインタビュー5回分の記録である。今回、黒田氏の御厚意により、活字化されたインタビュー原稿の公開許可を頂いた。貴重な資料を提供いただいた氏には深謝申し上げます。

本インタビューは、インタビュー時の録音や当時のメモから、黒田氏がこれを対話形式にとりまとめたもので、録音をそのまま書き起こしたものではないことをお断りしておく。そのため、5回のインタビューそれぞれの範囲を明確にすることは難しい。音源は残念なことに現在失われており、確認することはできない。飯田氏のインタビュー記録は、論創社から『奇譚クラブ』から「裏窓」へ』（以下、飯田2013）として刊行されたものがあるが、今回紹介するインタビューは本書へ収録されたものとは別である。

本インタビューでは、飯田氏が投稿作家として関わった『奇譚クラブ』、そして編集者として関わった『裏窓』、『サスペンス・マガジン』およびその発行元の久保書店について主に語られている。（飯田 2013）と重複する部分も多いが、『裏窓』後継誌である『サスペンス・マガジン』の編集長を務めた島本春雄や、吾妻新の筆名で『奇譚クラブ』に投稿していた村上信彦、『裏窓』発行人であった山田忠雄という人物をはじめとした久保書店の内実に関する内容は今回初めて語られたものである。筆者は既に、吾妻新が村上信彦の筆名であることを実証しているが（河原2016）、本インタビューでこの事実が飯田氏の口からも語られたことの意義は大きいと考えている。

以下、まず飯田氏の仕事を概観した上で、インタビュー本編を提示したい。以下、敬称を省略して述べさせていただく。

## 1. 飯田豊一氏の仕事とその功罪

### (1) これまでの評価と本稿の立場

飯田豊一の評伝は、都築響一氏と、中原るつ氏によるものがあり、小田光雄氏がとりまとめ書籍化したインタビューが自伝の役割を果たしている（都築 2011, 中原 2008, 飯田 2013）。ただし、飯田の活躍は非常に多岐にわたり、活躍期間も 60 年以上に及ぶため、そのすべてをとらえた評価はいまだなされていないし、筆者にも現状それは困難と言わざるを得ない。とりわけ今回、飯田氏の芝居関係の仕事については割愛せざるを得ず、アートビデオ、シネマジック、不二企画などのアダルトビデオ会社/レーベルでの仕事に関しても、甚だ不十分な調査しか行えなかった。あらかじめお詫び申し上げます。

飯田氏は、2004 年に『「奇譚クラブ」の絵師たち』を河出書房新社から刊行して以降、熱烈なファンが未だ多数存在する『奇譚クラブ』の内実を知る者として、さらに戦後の大衆メディアを作り支えた生き証人として、その出版文化とのかかわりが注目されてきた。そのため主に 1950～1970 年代までの事跡を語ることが多かったといえる。その他の彼の業績については、SM 愛好者のコミュニティ内で評価され語られることはあっても、研究者を含めたより広い層から関心を持たれることは少なかった。本稿掲載インタビューもまた、主に『奇譚クラブ』と『裏窓』時代の飯田に焦点化している。そのため、本稿で飯田のその後の仕事に触れる必要は必ずしもないといえる。

しかしながら、1970 年代以降、飯田が作家活動を辞め緊縛関係の活動に完全にシフトしたのならともかく、彼は 2013 年に没するまで、旺盛な作家活動を継続した。つまり現状、作家活動に限ったとしても、彼の仕事のうちごく一部にしか光が当たっていないと言え、このような状況は筆者には不適切だと感じられる。そこで本稿では、インタビュー内容の範囲を超えて、飯田の仕事を 2013 年まで概観することとした。ただし、1950 年から 2013 年までという長い期間をすべて詳細に調査することはできていないため、極めて不十分かつ暫定的なものであることをお断りしておく。さらに、筆者は飯田が制作した緊縛写真・ビデオを評価する知見をほとんど持たないため、この点に関して卑見を添えることは避けた。適切な研究者がこの暫定的なまとめを更新してくれることを期待している。まずは、飯田の仕事を緊縛関係と作家活動に分け、それぞれの仕事の意義と到達点を示すことを試み、その後、時代別に彼の仕事をみていきたい。

### (2) 緊縛関係の活動

麻や綿製の縄によって人体を複雑に縛る緊縛は、日本を発祥とするが、現在、Shibari もしくは Kinbaku として欧米・アジア等に広がり、愛好者は非常に多い（田中 2015）。緊縛、とりわけ女性への緊縛は暴力とみなされがちであるが、これらのコミュニティでは同意や安全性への配慮がなされ、時には必ずしも性的でない文脈で緊縛が楽しめることもある。

次章でやや詳しくみていくが、飯田は 1972 年より、国内で発売された多数の SM 雑誌の緊縛グラビアの縛りを一手に引き受け、1980 年代後半からは自ら不二企画、ライトブレンを立ち上げてオリジナルの緊縛・フェティッシュビデオを制作した。彼がつくりあげた緊縛のビジュアルイメージが現代緊縛文化の形成に与えた影響は計り知れない。

特筆すべき点として、飯田は、女性への暴力とは異なるプレイとしての緊縛及びサディズム、フェティシズムのあり方を熱心に啓蒙し、自ら実演していったことが挙げられる（藤見郁「ロマンチック

なサディズム」『奇譚クラブ』1954年7月号など)。現在、多くの人々が趣味として、仕事として、そしてリラクゼーションとして緊縛を楽しんでいるが、このような文化の形成は彼のこの活動を抜きに語れない。さらに重要なことは、彼がこの活動の過程で、縛られたいという欲望、とりわけ女性の欲望を可視化したことである。飯田が1989年から約10年間発行した『緊美研通信』では、一般的には女性の性的モノ化や搾取と呼ばれる事態が、ほかならぬ女性自身によって快樂として語られており、彼女たちが単なる被害者、あるいは治療が必要な異常者なのではなく、主体性をもって緊縛を求める人々であることがはっきりと示されている。

だからといって、飯田は女性の欲望に甘んじ、緊縛を施す側の権力に無自覚だったわけではない。飯田が「緊縛師」や「縛師」といった呼称を自らに使用せず、「縛り係」と自身を位置づけていたことは、彼の立ち位置をよく示すものである。彼は様々な媒体に繰り返し「緊縛師」や「調教師」といった呼称に対する違和感を表明しているが、そのうちの1つを見ておきたい。飯田は、緊縛によって女性に快樂を与えることを願いつつも、自身を女性の上に置くことは好まなかった。自分は単に縄で女性を縛ることが好きなだけであり、それをえらいと思ったことも立派だとも思ったことがないという。

縄で女の人の体を縛って、吊るしたり叩いたりして、それで雇い主からお金をもらって、なにか『師』ですか。『師』とは人を教え、導く人のことですよ。手本となるような、りっぱな人のこと、と辞典に載っています。女を縛ってよろこんでいる人間の、どこがりっぱですか。ちゃんちゃらおかしい。(濡木 2007年11月16日)

筆者は緊縛技術を評価する能力を持たないが、飯田の緊縛を、非常に美しく、芸術的だと評価する声はよく聞かれる。しかし飯田は、緊縛からエロや猥褻の要素を排除することに消極的だった。現在、緊縛はその芸術性や精神性が高く評価され、ショー緊縛やインスタレーションなどの芸術分野にも進出している。しかし飯田は、最後までこれらと距離をとり、エロく、猥褻で、恥ずかしい緊縛、しかしだからこそ受け手・縛り手双方にとって楽しい緊縛を追求していたと筆者には思われる。その上で飯田は、膣ペニス性交の補助手段である緊縛、つまりは女性の身体の自由を奪い、男性の欲望を遂げやすくすることを目的とするような緊縛を激しく批判した<sup>1)</sup>。緊縛が挿入行為の補助手段としてのみ扱われることに強く抵抗し、縄自体の快樂を主張もした。1986年に結成される緊縛美研究会は、飯田のこの考えを基礎として運営され、モデル女性は性器を露出せず、会員が女性に勝手に触れることも厳禁とされていた。会誌『緊美研通信』を見る限り、飯田以外の会員もまた、開脚型の緊縛やバイブレーターなどのセックストイの使用に強い忌避感を表明する者が多数を占めていた。

このような挿入行為と緊縛プレイの切断は、当時大量に制作されていた商業緊縛グラビア・ビデオに対する反感に基づくものとも思われるが、そうだとしても、彼らが挿入主義ではないエロや猥褻を追求していたことは貴重である。現在、緊縛プレイと挿入が全く別の行為であることは理解されつつあるが、このような認識が成立した背景には、飯田の粘り強い仕事があったと言えるだろう。

### (3) 作家活動

飯田の作家としての評価については、中原るつ氏による評伝において語られている(中原 2006)。

中原氏は飯田氏の作品を純文学であるとして高く評価する。しかしこれをのぞき、飯田の著作が文学として正当に評価されているかと言えば、現状そうではないと言わざるを得ない。飯田には複数の受賞歴もあるが、彼の多くの著作が性的な内容、それもサディズムやマゾヒズム、フェティシズムといった内容を含む作品であるがゆえに、等閑視されていると言い得るだろう。

このような作家としての評価に比して、飯田の証言者としての評価は一般に高い。飯田は、河出書房新社から『「奇譚クラブ」の絵師たち』、『「奇譚クラブ」とその周辺』という2冊の著書を刊行し、これによって、それまで限られた範囲にしか知られていなかった『奇譚クラブ』のありよう、『奇譚クラブ』や『風俗草紙』、『裏窓』などの雑誌がどのように編集されていたのか、どのような人物が寄稿していたのかといった、現代において知ることが困難な領域を照らし出した。飯田によって、戦後のマニア雑誌の研究の道が開かれたと言っても過言ではない。

しかしながら、現在、飯田を単なる証言者として扱い、その著作から事実のみを掬い取ろうとする態度が研究者や好事家から見られることがある。このような態度は、あまりに作家としての飯田を軽んじていると言わざるを得ない。この問題は、別の大きな問題へも繋がっているため、節を改めて検討しておきたい。

#### (4) 「飯田史観」の功罪

飯田の『奇譚クラブ』・『裏窓』に関する著作の内容は、当時を知る者の証言として、かなりの信頼を置かれているといえる。確かに飯田の著作には、それまで知られていなかった貴重な情報が大量に含まれ、もはや飯田の著作抜きで『奇譚クラブ』や『裏窓』の研究をすることは不可能であるといえる。しかし、飯田の作家活動を踏まえれば、彼の著作をただちに証言として扱うことはためらわれる。事実から想像力を膨らませ、巧みに魅力的なストーリーを創造するのは作家の常であるが、飯田はとりわけ、あたかも事実のようにそれを書き綴り、虚実をあいまいにすることで読者の想像力を掻き立てる手法を用いてきた。『実録・縛りと責め』（河出書房新社、2001）、『性の秘本・責めと愉悦』（河出書房新社、2003）、『緊縛★命あるかぎり』（河出書房新社、2008）はその典型である。このような手法は、緊縛やSMという、モデルとなった人物への配慮を必要とするテーマを描くためには当然であるともいえよう。

『「奇譚クラブ」の絵師たち』、『「奇譚クラブ」とその周辺』は、一見彼が見たこと、聞いたことを正直に書き綴っているかのような体裁になってはいるが、それを十分な検証なく事実とみなすことはできない。飯田の語る『奇譚クラブ』の物語は、非常に巧みに、魅力的に描写されているがゆえに、これまで信頼され、「飯田史観」とでも呼ぶべき史観を形成してきたと言える。しかし、飯田が語る『奇譚クラブ』のエピソード、位置づけ、歴史は、あくまで彼が紡ぎたかった物語であり、客観的事実を語ろうとしたものではない。多分に推測が含まれ、また偏りがあることに注意しなければならない。飯田はあくまで『裏窓』の編集者であり、『奇譚クラブ』とのかかわりは一寄稿家にすぎないという事実は、強調してもしすぎることはないだろう。彼は草創期の『奇譚クラブ』には一切関与しておらず、彼の語ったことは、彼の「盟友」・須磨利之や、『奇譚クラブ』編集者・吉田稔から聞いたこと、感じたことから推測したもの過ぎない。証言として飯田の著作を捉えるならば、史料批判が必要である。（飯田2013）も、本稿で紹介するインタビューも同様である。

例えば、飯田は繰り返し、『奇譚クラブ』は、喜多玲子、美濃村晃などの変名を用いて活躍した須磨利之によって作り上げられ、マニア雑誌としての地位を確立した、と語ってきた。『奇譚クラブ』

最大の功績者は須磨である、と語り、これは現在「SM ペディア」などのウェブサイトにも記載され、多くの人が参照可能な状態になっている。しかし、この飯田の主張は実は根拠に乏しい。

須磨利之は、確かにカリスマ的な人気を誇った絵師であったが、『奇譚クラブ』に関してはその影響力を過大に見積もるべきではないと筆者は考えている。なぜなら、第1に、須磨が『奇譚クラブ』の発行元である曙書房に在籍していたのは、1948年10月から1953年6月の5年弱であり、28年間刊行された『奇譚クラブ』の歴史からすればわずかな期間でしかないからである。『奇譚クラブ』は1952年5・6月合併号においてA5判にリニューアルされ、以降人気は沸騰する。マニアが愛好する『奇譚クラブ』と言えば、このA5判以降を指すことが多いが、この時期に限れば、須磨の関与はわずか1年である。

もちろん、期間の短長は影響力の多寡とただちに一致はしない。筆者が重視したいのは、須磨は曙書房を退社した後、多くの雑誌を立ち上げているが、そのいずれも『奇譚クラブ』ほどのファンを獲得することも、雑誌を継続することもできていないという事実である。『奇譚クラブ』の成功が真に須磨によるのであれば、須磨が新たに創刊した数々の雑誌も、さらに成功を収めてもよかつたはずではなかろうか。これに対して、『奇譚クラブ』は須磨退社後も長く刊行を続け、団鬼六や千草忠夫ら職業SM作家を輩出し、今なお多くの人々に特別な思い入れを持って愛されている。それは、『裏窓』の編集長だった飯田が、自身でつくりあげた『裏窓』や『サスペンス・マガジン』、そして『あぶめんと』ではなく、一寄稿者に過ぎなかった『奇譚クラブ』について熱心に語ったことに端的にあらわれているだろう。このような状況を鑑みれば、須磨よりも、28年間『奇譚クラブ』を発行し続けた曙書房社長・編集長吉田稔の手腕こそが、本来なら評価されてしかるべきではなかろうか。さらに言えば『奇譚クラブ』には実は須磨参加以前から、周縁的なセクシュアリティの当事者に対する肯定的なまなざしがあった<sup>2)</sup>。

この他にも飯田は、『奇譚クラブ』を客観的に語るとするならば必ず言及されてしかるべき、辻村隆についてほとんど筆を割いていない<sup>3)</sup>。1953年の突然の須磨の退社も、円満なものだったとしばしば語ったが、この点も飯田の推測に過ぎない。須磨は、曙書房を退社後、1954年1月、東京でライバル誌『風俗草紙』の創刊に関わる。吉田は、飯田に『風俗草紙』には「なるべく書かないでほしい」と手紙で伝えてきたという（濡木2004: 118頁）。このような客観的経緯、そして飯田が挙げる根拠が、須磨・吉田双方から互いの悪口をきいたことがないという1点のみであることを踏まえれば、須磨の退社が円満なものであったと考えることはなかなか難しい。

東京三世社『SM セレクト』の創刊メンバーであった仙田弘の回顧録『総天然色の夢』（2000）には、飯田が描写したものとは異なる須磨の姿があらわれる。

仙田は、それまで何ら関心を抱いていなかったSMに関する雑誌を創刊することになり、『あぶめんと』が終刊したばかりの須磨に協力を仰ぎ、緊縛グラビアの縛りを担当してもらっていたという。しかし、須磨は東京三世社を電撃退社した編集者宮坂信と共に、新たにライバル誌『S & M コレクター』を創刊してしまう。『コレクター』は、『セレクト』と全く同じ挿画家、小説家、カメラマンを用いており、仙田は、宮坂・須磨は『セレクト』を潰そうとしているのではないかと感じたという。1953年、曙書房を退社しライバル誌『風俗草紙』を創刊した過去を想起せずにはいられないエピソードであるが、仙田は、『コレクター』創刊後、『セレクト』の緊縛グラビア撮影における須磨の態度の「豹変」について下記のように述べている。

さあ、次はなにします。どんな縛りがいいか言って下さい。具体的に指示してもらわないと縛りませんからと言う。今までは立ちか座りか寝か、その度ポーズを決め、後はおまかせだった。須磨氏がその状況や女のこの体型に合わせ、(中略)無数の縛りを見せてくれていた。急変した態度にとまどうばかりだった。縄は麻でなくてはいけません。私の使用している縄には女人の汗と脂が浸み込み、柔らかく自在に女性を歓喜させることが出来ますなんて面白いことを語ってくれていた人が綿ロープの未使用のものを持って現れた。「コレクター」と同じ縄を使うのも変ですから、今日から綿ロープにしましょうと、豹変した。これはショックだった。(214-215頁)

仙田によれば、須磨は『コレクター』のグラビアにのみ迫力が出る麻縄を用い、『セレクト』の撮影には綿ロープを持参したうえ、それまでとは打って変わって非協力的な態度に変貌したという。須磨にはこれ以上縛りを頼めないと悟った彼は、新たに飯田に縛りを依頼することにしたと述べている。須磨は、マニアの側に立った編集者であったと飯田は強調しており、それはおおむね真実であったと思われる。しかし、曙書房を退社した須磨が編集に加わったのは、病理的なまなざしが強く、飯田をはじめ、多くのマニアが嫌った『あまとりあ』であり、『風俗草紙』であったことについて、飯田は十分な説明をしていない。飯田は『あまとりあ』の末期の号に須磨が喜多玲子名義で挿画を描いていた事実に触れていないが、須磨は『あまとりあ』1955年2～5号に喜多玲子として豪華なイラストを描いている<sup>4)</sup>。

このように、飯田の『奇譚クラブ』へのまなざしはかなり偏っている。本人としても、客観的事実を語っているつもりもなかっただろう。飯田と須磨は、「御神酒とっくり」と周囲から呼ばれるほど親密であり、飯田が語る物語が須磨びいきになってしまうことはある意味当然のことであるし、それが歴史書でなく作品として書かれている以上、批判されるべきことでもない。彼がもし事実を正確に後世に伝えたかったのであれば、まずは『裏窓』について語ったはずであるし、『奇譚クラブ』に関して、飯田よりもっと適任の人物に語らせるか、自身で調べたり確認したりしたはずである。そうしなかったことには何の問題もないが、飯田氏の著作が事実として流布し、結果的に吉田稔の功績が過小評価される事態を招いていることに注意する必要がある。研究者や、歴史的事実を求めようとする者が、飯田の作品、そしてインタビューから何かを得ようとする際には、この点を踏まえ、慎重に検討を進めていく必要がある。

最後に飯田の著書における、記憶違い等の単純な事実ベースでの誤りをいくつか指摘しておく。飯田は(濡木2004:251-252頁)、(飯田2013:141頁)において、『奇譚クラブ』に真木不二夫名義で連載していた「黄色オラミ」に触れ、『裏窓』編集長に就任したことで多忙となり連載を中止したこと、これに対して、沼正三から連載を続けてほしいとメッセージが『奇譚クラブ』に掲載された、と述べている。しかし、飯田が『裏窓』編集長に就任したのは1962年1月であるが、「オラミ」途絶のお詫びが掲載されたのは実はその5年前の1957年4月号(172-173頁)である。翌5月号は休刊であるため、沼からの激励は、実質上の次号である同年6月号(112頁)に掲載されている。途絶の理由は「今度新しい型のP・R雑誌を作り出すため、昨年暮れより東京と関西を往ったり来たり」して多忙であることだと述べられている。名古屋での『スタイルノート』と『シャインニュース』編集のことを指しているのは明らかであり、時期的にも一致する。

また、(濡木2006:10頁)、(飯田2013:18頁)では、『奇譚クラブ』に須磨利之が参加したのは創刊から4年後、すなわち1951年のこととしているが、これも誤りである。1948年10月号(通巻9号)の

表紙は須磨の手によるものであり、この頃から須磨の関与が確認できる。

『奇譚クラブ』が1947年の創刊からまもなくは月刊誌ではなかった、という記述もあるが、これも誤りである。『奇譚クラブ』は創刊時から月刊誌であり、幾度か休刊があるものの、基本的に毎月発行されていた（龍 2013a）。さらに、春川光彦が藤野一友の筆名だという証言も、誤りであることを確認している。

さらに、（飯田 2013: 19 頁）では、『奇譚クラブ』の西洋風の表紙画は、フックス『風俗の歴史』、フックス&キント『女天下』の原著図版だと考えてよいかというインタビュアーの質問に対し、「そのとおりだと思いますよ」と答えているが、これも誤りである。『奇譚クラブ』の表紙に使われた西洋風の風刺画めいた絵は、フランスの週刊誌『ラ・ヴィ・パリジェンヌ』（La Vie Parisienne）のものである（龍 2013b）<sup>5)</sup>。

このように、飯田の著作には多くの事実誤認がある。しかしそれは当然のことであり、そのためにこれらの著作の評価が下がるわけではない。これは飯田の咎というより、読者側の問題である。これらの誤りのある程度は資料を確認することで解決可能であるため、その労を惜しむべきではないだろう。

以上、とりわけ『奇譚クラブ』や『裏窓』に関する飯田の語りについて、その「証言」としての問題点を指摘してきたが、だからといって、飯田の語ったことに全く価値がないわけではない。匿名作家の実名や、当時の雑誌編集部の人員については、飯田の証言が無ければ全く知り得ず、暗中模索であるものが大半である。誤りや虚偽を含む情報であったとしても、まずはこれらの情報を糸口として裏付け調査を進められることはありがたい。さらに重要なことは、飯田の語りは、ほかならぬ飯田の多数の著作を読み解く重要な手掛かりになることである。飯田が戦後のマニア雑誌文化において非常に重要な作家であったことは疑いなく、飯田作品そのものの分析が今後待ち望まれている。

## 2. 飯田豊一氏の仕事・年代別まとめ

以上の問題意識を踏まえ、本稿は飯田の仕事のうち、現在事実として確認することのできる著作や活動のみを取り上げ、そのごく一部を年代別に記述した。まず時期別に、著作や活動を時系列で列挙し、その後注釈を加えた。本稿掲載インタビューで言及のある著作は優先して列挙している。

著作の年月は、掲載号の発行年月ではなく、○月号等の月を記した（例えば、1953年11月25日発行の12月号である場合、1953年12月と記した）。掲載した著作は、原則として掲載誌を直接確認したものにとどめているが、未確認ではあるが、存在した可能性が高いものに関しては、その旨注記し、情報の出典とともに掲載した。

出典として主に用いたのは、寄稿先の雑誌および、風俗資料館所蔵の「濡木痴夢男仕事メモ」である（以下、<仕事メモ>）。<仕事メモ>は、途中で脱落はあるものの、1958年5月23日から1996年12月にかけての、飯田の著述活動を中心とした仕事の記録であり、各月ごとに、執筆作品の題名・筆名・枚数・掲載先などの情報が几帳面に記録されている。1972年以降は、緊縛撮影の記録もこれに加わる。掲載誌を可能な範囲で確認した限りにおいては、いくつかの掲載誌の誤り等があるものの、かなりの部分が正確に書かれており、信頼性の高い資料と言える。ただし、<仕事メモ>

は、同時代のメモ部分と、飯田が後年付した注部分がある。飯田はこの仕事メモを1998年及び2007年に自身の書庫から発見したそうだが、その際に、メモの余白に、発見時段階の自身による注釈を施している。この注釈によって、多くの匿名作家の実名、当時の出版物の部数、当時の編集部の実情を今に伝えるエピソードなどを知ることができる。ただし、〈仕事メモ〉は飯田の全仕事を記したのではないこと、さらに注釈部分の信頼性はメモ本文とは分けて考える必要があることは重要である<sup>6)</sup>。

〈仕事メモ〉は、非常に網羅的に飯田の仕事が記録されているかの印象を与えるが、そうではない。飯田は、自身の「仕事」として認められるもののみをメモに記載しており、埋め草記事や思い入れのない作品、また自身が納得できない出来栄の作品などは記録していない。飯田の仕事の全容を知ることが、〈仕事メモ〉だけを以てしてはできず、記録すらされていない膨大な量の著作が背後に存在することを想定しなければならない。

なお、〈仕事メモ〉は収蔵形態の関係上、出典箇所を正確に示すことが難しい。メモが書かれた年月によって概ね該当部分にたどり着くことができるので、併せて年月を示した。注を参照した場合は年月に加えて注を付している。このほか、飯田の未刊行の資料・著作から、いくつかの情報を引用している。引用元は下記のように略称した。

- ・ 風俗資料館所蔵「濡木痴夢男仕事メモ」→〈仕事メモ+年月〉
- ・ 風俗資料館所蔵「ぬれきしんぶん」→〈ぬれしん+号数又は発行年月日〉  
本資料は1999年7月26日から2000年10月12日の間不定期に発行された新聞である。A4・モノクロで、濡木主催の緊縛美研究会の会員に配布したものと思われる。書き手は飯田1人だが、会員から飯田への手紙が掲載されたり、研究会のレポートが掲載されたりした。
- ・ 風俗資料館蔵・濡木氏関係の私信（手紙・ファックス原稿）〈発信者→受信者+年月日〉
- ・ ウェブ連載・「濡木痴夢男のおしゃべり芝居」→〈芝居+連載回数〉
- ・ 『緊美研通信』→〈通信+号数+発行年〉

なお、本章末尾に単行本として刊行された飯田の著作一覧を示した。これはあくまで筆者が現段階で把握しているものに留まる。選集等に作品が再録されているものも含めている。

## 【1950年代】

1950年～52年頃、飯田豊一名義で反戦詩集に詩「ハモニカ長屋のおかみさんたち」を寄稿したとされるが、発見できていない〈芝居34〉。

1952年7月、飯田豊一「若い女の死」（『人生手帖』第1巻7号）

1953年4月、飯田豊一「小さな闘いの歌」（『列島』4号）

1953年11月、青山三枝吉「悦虐の旅役者」（『奇譚クラブ』1953年11月号）

1953年12月、青山三枝吉「春風座秋の旅路」（『奇譚クラブ』1953年12月号）

1954年1月、真木不二夫「美しき悪魔の咲笑」（『奇譚クラブ』1954年1月号）

1954年3月、真木不二夫「魔性の姉妹」（『奇譚クラブ』1954年3月号）

1954年7月、藤見郁「ロマンチックなサディズム」（『奇譚クラブ』1954年7月号）

1954年10月、藤木仙治「たのしきかな時代劇」（『奇譚クラブ』1954年10月号）



1956年5月、飯田豊一「ラクな姿勢からの脱出」・同「ぶたの歌」（『若い広場』94号）

1956年10月、矢桐重八「一男色者の手記」（『奇譚クラブ』1956年10月号）

1956年12月、真木不二夫「黄色オラミ誕生」（第1回）（『奇譚クラブ』1956年12月号）

1956年12月、株式会社旭一<sup>7)</sup>（名古屋市瑞穂区竹田町4-13）発行のPR雑誌編集部門に在籍、『シャインニュース』・『スタイルノート』の刊行に携わる（～少なくとも1957年10月）<sup>8)</sup>

1957年12月、飯田豊吉「青い顔の男」（『裏窓』1957年12月号）

1958年10月号、南村蘭「独立黒月党」（『裏窓』1958年8月号）

1959年3月、藤木仙治「乳房に火をつけるな」（『奇譚クラブ』1959年3月号）

飯田20代。これ以前にもおそらく執筆活動や演劇活動を行っていたと思われるが全く裏付けを取ることができないため今回は割愛した。1950年以前に関する飯田の語りについては、（都築2011）や<芝居>を参照されたい。「若い女の死」、「小さな闘いの歌」は、1頁未満の詩である。この他、『人生手帖』第1巻7号掲載の飯田豊一「若い女の死」、『若い広場』94号（1956年5月号）掲載の飯田豊一「ラクな姿勢からの脱出」、同「ぶたの歌」も、おそらく飯田作だと考えられるが、決定的な決め手はない。青山三枝吉名義の「悦逆の旅役者」は、『奇譚クラブ』への初掲載作品であり、（飯田2013）に再録されている。その後長く使うことになる筆名、藤見郁、矢桐重八、南村蘭、藤木仙治もこの時期に出揃う。

『奇譚クラブ』1954年3月号は、刑法175条抵触による疑いで、発売後数日をまたず発禁となったが、問題とされた箇所は飯田の「魔性の姉妹」の描写が含まれた（148頁上段9行目より下段7行目）<sup>9)</sup>。この時期、東京で須磨利之が立ち上げた類似誌『風俗草紙』もまた発禁とされ、1954年3月号、5・6・7月号が発禁、10月号で廃刊となる。サディズム、とりわけ女性への緊縛などを掲載する性風俗雑誌は、わいせつなだけでなく、戦後民主主義の理念に抵触する「悪書」として、強い批判にさらされていた。飯田は著書において、幾度も当時の警察の取り締まりの厳しさを強調し、これを強く批判している。

旭一（旭一シャイン工業）の『シャインニュース』・『スタイルノート』は、飯田の名や写真が雑誌中に確認できる範囲を記しているため、実際の在籍はより長い期間である可能性がある。なお、『スタイルノート』1957年10月号、11月号には同じく『奇譚クラブ』寄稿者であった村上信彦が寄稿している。

飯田は、旭一へ勤め始めた経緯を、自ら応募した、東京で所属していた会社から出向しろと言われた、などさまざまに語っているが、（飯田2013）では、「東京駅の八重洲口の前」にあった「キャバレー会社」である「東京観光」という会社の美術部に勤務していた頃、新聞広告でデザイナーの募集をみて応募したと述べている（66-67頁）。ただし、旭一は名古屋に本社を置きつつも、当時東京・大阪に営業所を持っていた。東京営業所の住所は、東京都中央区八重洲五丁目7<sup>10)</sup>であり、まさに「東京駅の八重洲口の前」にあるため、飯田が東京で働いていた企業もまた旭一であり、名古屋本社へ出向を命じられたという可能性もある。

『裏窓』初掲載作「青い顔の男」は、サスペンス仕立てのストーリーの中に、自然な形で女性への緊縛や尻叩きが盛り込まれ、さらに平和的で前向きなエピローグが付されるという、およそ摘発対策という面で完璧な内容の小説である。『奇譚クラブ』デビュー作である「悦虐の旅役者」は、飯田が愛好した長田幹彦「零落」の影響が感じられ、本人の強い思い入れがストレートに表現された作

品であったが、3年後の本作では、既に編集側の視点をしっかりと踏まえ、かつ一定水準以上の作品に仕上げる技術が確立されているといえる。本作を読んだ須磨利之が飯田とすぐに面会して久保書店へと囲い込もうとしたことも納得できる。

飯田は<仕事メモ 1959/03 注>にて以下のように述べている。

この1959年（昭和34年）という年は、このノートを見ると、著述業として成立した年であることが、いまわかる。小説を書くだけで、生活費が稼げるかどうか、その不安が「起稿」とか「脱稿」の文字の行間にある。また、一ヶ月間に何枚書いたか、などと、しきりに計算しているのも、原稿料ではたして食って行けるかどうか、不安だったのであろう。

例えば、『裏窓』1959年5月号掲載の南村蘭「砂漠の女囚」であれば、原稿枚数35枚、2月26日起稿、3月1日に脱稿、そして翌2日に発送したことが記されている。35枚をわずか4日で完成させている。30～40枚の作品であれば、おおむね3～5日程度で脱稿しており、早いものでは2日という記録もある。この時期の飯田は、<仕事メモ>に記載しているものだけで月に200～300枚の執筆をこなしており、1959年5月では、9作品合計264枚である（寄稿先は、『裏窓』が3本、『奇譚クラブ』が2本、日本文芸社が2本、そして東日本新聞社サンデー日本にコントを2本書き下ろしている）。十分に生活が成り立つ量であろう。今後飯田はこの量の執筆を20年以上続けていく。原稿料に関しては逐一記載があるわけではないが、『奇譚クラブ』1959年12月号掲載「黄色オラミ誕生第3回」は、24枚で3500円、『裏窓』1959年11月号掲載の「猛牛鬼道場第4話」は50枚で10000円との記載がある。『奇譚クラブ』は1頁換算で145円、『裏窓』は200円となる。稿料の記載があるものを換算するとほぼこの頁単価になるため、これが『奇譚クラブ』・『裏窓』における当時の飯田の原稿の相場であったとみなしてよいだろう。1959年の大卒公務員の初任給は10200円であったが、月産200枚以上をコンスタントに執筆していた飯田の月収は、それを数倍上回っていたはずである。

なお、本稿掲載インタビューで飯田は、『裏窓』への原稿が一作書きあがるたびに編集部へ持参していたと述べているが、<仕事メモ>では発送したものも多く見受けられる。

#### 【1960年～1970年9月（『あぶめんと』廃刊まで）】

1960年5月、塔婆十郎「悪夢の記憶」（『奇譚クラブ』1960年5月号）

1960年9月、青山三枝吉「暗黒街の処刑室」（『風俗奇譚』1960年9月号）

1961年9月、21日、久保書店に入社することを承諾<仕事メモ 1961/09>

1962年1月、『裏窓』の編集長に就任

1962年2月、藤見郁「巨大な地下拷問室」（『裏窓』1962年12月号）

1962年12月、北園透一郎「かわいい調教師」（『裏窓』1962年12月号）

1963年6月、南村蘭「マゾヒズムバレエ」（『裏窓』1963年6月号）

1965年2月、『裏窓』終刊、後継誌『サスペンス・マガジン』創刊（～1980年12月）

1968年5月、白鳥大蔵「緋縮緬地獄」（『奇譚クラブ』1968年5月号）連載開始（～1969年12月号）

1969年5月、『サスペンス・マガジン』休刊（～1972年1月復刊）

須磨利之・椋陽児とともに久保書店退社

1970年、須磨を社長として、株式会社虻（あぶ）プロダクション設立・入社

1970年4月、1日、須磨・椋とともに『あぶめんと』創刊

1970年9月、『あぶめんと』終刊（全6号）。虻プロダクション解散。以降、個人事務所のような形態の「ゆたか編集室」を窓口の仕事を受注するようになる（～少なくとも2000年6月<ぬれしん43>）

飯田30代。1960年～1962年は、『奇譚クラブ』、『裏窓』に寄稿をしつつ、新たに文献資料刊行会発行の『風俗奇譚』（1960年1月創刊）への投稿を開始している。『裏窓』には毎号飯田豊吉、藤見郁、南村蘭、矢桐重八名義で少なくとも3本の小説が載り、豊田一狼、青山三枝吉名義も多くみられる。『奇譚クラブ』には、塔婆十郎、矢桐重八、市川国彦などの名義で、月1、2作の寄稿を続けている。

『風俗奇譚』初めての掲載作は、青山三枝吉名義の「暗黒街の処刑室」である。翌10月号にも青山名義で「復讐鬼」を寄稿、翌11月号には島木恵子名義で「拷問倉庫」を寄稿している。『風俗奇譚』の原稿料は、1961年3月段階で、36枚6210円との記述がある（1枚172.5円）。（濡木2004）において、濡木は『奇譚クラブ』の原稿料について触れ、「予想外に多い金額だった」と述べており、原稿料は「たしか一枚三〇〇円だった」と述べているが（63頁）、1950年代末～60年頃にかけては、原稿料は『裏窓』がとびぬけて高く、『風俗奇譚』がそれに続き、『奇譚クラブ』は最も安かったことがわかる。当時の物価が基本的に毎年上がっていたことを踏まえれば、1953年段階の1枚300円という証言は記憶違いである可能性が高い。

飯田の名は、『裏窓』1961年11月号から、須磨利之にかわり編集人として誌上に見えるようになる。飯田がいつ久保書店に入社したのか、入社した直後から『裏窓』編集長を任されたのかは、飯田の証言が様々であるためはっきりしない。本稿では、<仕事メモ1961/09>の記載を採用した。（飯田2013）では、飯田が久保書店に入社することを保留している間に、須磨利之が『裏窓』に勝手に編集長交替記事を掲載し、飯田の編集長就任を既成事実化してしまったと述べられている（140～141頁）。編集長交替告知は、確かに1961年12月号に掲載されているが、これは<仕事メモ>の入社承諾日より後である。これらの事実を総合して勘案するに、飯田は9月21日に、久保書店に入社し『裏窓』の編集に携わることを承諾したが、この時はまだ編集長までは引き受けていなかった。おそらく10月から働き始めたのだろうが、須磨が入社後すぐに半ば強引に編集長に飯田を押し上げた、という流れが妥当のように思われる。

編集長就任直後の1962年は、<仕事メモ>上の仕事は激減しているものの、実際には継続して著作が掲載されている。この頃から『裏窓』に掲載される緊縛写真の縛りも担当していたとみられるが、この点について飯田自身はほとんど語っていない。翌年から<仕事メモ>への記載は再開され、とりわけ藤見郁名義の作が多い。『奇譚クラブ』への寄稿は減るが、白鳥大蔵名義の長期連載「緋縮緬地獄」は、彼の代表作のひとつとなる。

『裏窓』は、1965年1月に休刊し、翌2月、後継誌である『サスペンス・マガジン』が新たに創刊される。その理由は本インタビューでも飯田が明言している通り、摘発対策とみなして問題ないだろう。『サスペンス・マガジン』は、悪書として目をつけられていた『裏窓』をどうにか継続刊行していくために、「雑誌名を『サスペンス・マガジン』に改題し、推理小説を少し混ぜ込んで推理小説専門誌のようにカムフラージュ」することにしたという。創刊号には、カタカナ表記に加えて「Suspense Magazine」も付され、SとMのみ色を変え、SMと読み取れるように工夫されている。



このように、雑誌継続のため苦心をしたものの、『サスペンス・マガジン』は1969年5月号で休刊となる。飯田は、共に『サスペンス・マガジン』を編集していた須磨・椋陽児とともに久保書店を退社、自身らで会社を作り、『あぶめんと』を創刊するに至る。『あぶめんと』の奥付によれば、蛇プロダクションは東京都目黒区中目黒1-4、サードリ・ハイツ310号室にあった。

創刊号は、島本春雄「紅蜘蛛伝奇」に加えて、中康弘通、そして飯田の筆名である藤見郁、白鳥大蔵、南村蘭などの、SM雑誌でお馴染みのメンバーが並び、目次には須磨の名もある。目次カットには、手首をごく軽く縛られた女性のイラストがそえられている。初期の『裏窓』表紙を担当していた堂昌一の妖艶な緊縛画も掲載されているが、緊縛写真はなく、地味な印象はいなめない。奇妙であるのは、須磨=喜多玲子のイラストがごくわずかであることである。『あぶめんと』は、須磨と飯田、そして椋という、ヒットメーカー3人で世に送り出した雑誌であったが、1970年9月、半年間、6号で休刊となる。

『あぶめんと』終刊について、(中原2008)は、休刊の理由を当時のSM雑誌弾圧にみている。「休刊の数か月後には嘘のように呆気なく弾圧が解除され」、「怒涛のようなSM黄金期が訪れる」ため、「軌道に乗るには早すぎた雑誌」であったと評価する。『裏窓』や『サスペンス・マガジン』に関する弾圧は、確かに存在したとみなし得るため、『あぶめんと』もまた同様の弾圧を被ったことは十分に考えられる。

ところが、<吉田→飯田1970/09/29?>にみえる、『奇譚クラブ』編集者、吉田稔からのメッセージは、やや異なる雰囲気を与える。ここで吉田は、「大分退潮したといってもSMブームの余波は続いているのですから、少しでも早く続刊されるよう祈ります。小説なんか、発行部数は決して多くはありませんが、今年の夏場でも月に400とか500とか、注文は増えています。只今印刷中の十二月号も500部増刷します」と述べており、『奇譚クラブ』が存外好調に売れていることがわかる。そして、「SMブーム」が続いているという認識は、飯田の語る弾圧の激しさとは齟齬するものである。

吉田のいう「SMブーム」とは、『奇譚クラブ』で活躍した縄師、辻村隆のテレビ出演、『家畜人ヤプー』の単行本刊行、そして団鬼六「花と蛇」の大ヒットのことを指していると考えられる。確かに『奇譚クラブ』にも、1968年4月号から1969年12月まで、扉ページに「本誌自粛の徹底」という文が掲載され続けた(下図:1968年4月号より)。しかし、1970年1月号よりこの宣言は消え、同号には辻村が、テレビ番組「11PM」出演顛末記を披露している(辻村1970)。「自粛」中の1969年にも、「花と蛇」の連載をまとめた増刊号を5月に発売、かなりの売れ行きをみせたようである。

このような温度差は、東京と大阪という、『あぶめんと』と『奇譚クラブ』の発行拠点に起因している可能性もあれば、雑誌編集の方向性の違いが影響している可能性もある。『「奇譚クラブ」の絵師たち』にはっきりとあらわれているように、飯田は雑誌においてイラストを非常に重視していた。

SM雑誌において、投稿作品にそえられるイラストが重要であることは勿論であるが、『奇譚クラブ』は1955～56年にかけて何度も休刊を余儀なくされ、不安定な発行形態が数年継続する。この間はそれまでカラーだった表紙もモノクロとなり、誌面に掲載するイラストも目に見えて減った。カラー表紙に戻った後も、イラストはそれほど増加せず、文章主体の雑誌形態が継続される。このような雑誌のスタンス

本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文藝を研究する平和で  
 健康な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって挿情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企てるた  
 めの努力はいたしません。

の相違が、両誌の明暗を分けた可能性は検討されてもよいだろう。

### 【1970年11月～1980年代】

1970年11月、『SMセレクト』（東京三世社）創刊

1971年3月、藤見郁「パノラマ島秘譚」（『奇譚クラブ』1971年3月号）連載開始（～1971年8月号、全6回）

1971年12月、藤見郁「悦楽の美少女」（『SMファン』1871年12月創刊号<sup>11)</sup>）

1972年6月、岬洋二「甘い蜜の妄想」（『SMファン』1972年6月号）

1972年7月、21日、『SMファン』の緊縛グラビア撮影に縛り担当として参加<仕事メモ1972/07>。

1972年7月号、稲田幹二「蛇川人質店」（『SMファン』1972年7月号）連載開始（～1973年4月号、全10回）

1972年11月、1日・22日・28日、『SMセレクト』の緊縛グラビア撮影に縛り担当として参加<仕事メモ1971/11>

1973年1月、矢桐重八「夜鷹が泣いた淫らな炎」（『SMコレクター』1973年1月創刊号）

1973年2月、濡木痴夢男「カラー撮影同行記 憧球場のいけにえ」（『SMセレクト』1973年2月号）連載開始

1973年5月、北園透一郎「新アラビアの城」（『SMファン』1973年5月）連載開始（全7回）

1978年4月、濡木痴夢男「濡木緊縛日記 モデルさまざま」（『小説SMセレクト』1978年4月号）連載開始（～1987年11月号<sup>12)</sup>）

1979年9月、豊幹一郎「撮影同行記 美少女」（『SMコレクター』1979年9月号）連載開始

1982年1月、豊幹一郎「真のマニアはやっぱり孤独」（『別冊SMファン』1982年1月号）

1982年2月、豊幹一郎「いつまで撮り続ける形だけのSM写真」（『別冊SMファン』1982年2月号）

1982年2月、アートスタジオ（アートビデオの前身）において撮影<仕事メモ1982/02>

1982年6月、23・24日、アートビデオ撮影「背徳の誘惑」（浅見友子・小島明美）<仕事メモ1982/06><sup>13)</sup>

1985年10月、27日、「杉下なおみの会」初回開催<通信01.1989>

1986年1月、濡木痴夢男「縄好きマゾ女と練達縄師の愛縛往復レター」（『SMソドム』1986年1月創刊号）連載開始

1986年2月、2日、「杉下なおみの会」を改め、緊縛美研究会（緊美研）発足<通信01.1989>

1989年6月、『緊美研通信』創刊（～1999年12月、全23号、のちに『別冊 緊美研通信』を2冊刊行）

飯田40代～50代。1972年11月の『SMセレクト』の撮影は、（仙田2000）によれば、前述の通り、それまで緊縛グラビアで縛りを担当していた須磨利之の協力が得られなくなったためである。

「カラー撮影同行記 憧球場のいけにえ」は、前年11月22日の撮影体験をまとめたもの。ここで初めて濡木痴夢男という名前が使用される。この撮影同行記は連載となり、白鳥大蔵、若杉薫などの筆名も用いられ継続される。須磨が創刊に関わった『SMコレクター』にも豊幹一郎名義で同様の撮影同行記を連載している。<仕事メモ1972/10注>によれば、飯田は1972年10月15日、宮坂信にサン出版の編集部へ呼び出され、その場で原稿を書かされたという。この原稿はおそらく矢桐名義の「夜鷹が泣いた淫らな炎」だと思われる。

その後、縛り担当としての活動は他誌にも拡大し、1974年の<仕事メモ>によれば、平均して

『SM ファン』の撮影に月2回、『SM セレクト』に月4回程度参加した上で、時折『SM キング』の撮影も担当している。これに加えて、『SM コレクター』（1972年12月創刊、サン出版）と『アブハンター』（1974年6月創刊、サン出版）等の雑誌への寄稿も旺盛に行っており、月合計200～300枚を継続して執筆している。

1975年も同様に、精力的な活動を続けるが、1976年には、メモ上の月産枚数が200枚を割る月が増え、代わりに緊縛グラビア撮影の仕事の割合が増えている。ただし1977年、撮影7回をこなした7月の原稿枚数は297枚、その後も200枚を超える月が続き、往年の勢いを取り戻している。新雑誌が創刊されれば、そのまま飯田の寄稿先が増える、という図式であり、このほか、『SM 秘小説』、『SODOM』、『マニア倶楽部』等々でも活躍しているさまが<仕事メモ>からはうかがえる。

緊縛グラビア関連の仕事も増加の一途をたどる。1978年には、グラビア撮影元に『SM クラブ』が加わり、79～80年にかけて、撮影担当回数は月11～13回に及ぶようになる。しかし、依然として月100～250枚程度の執筆もこなしている。<仕事メモ>に限ってもこの量であり、驚嘆するしかない。しかし、1985年、『別冊 SM ファン』が8月、『小説 SM ファン』が9月で終刊となり、『小説 SM セレクト』も1987年11月をもって終刊する。SM 雑誌ブームにも陰りが見え始める。

1985年10月27日、緊縛愛好者のつとみである、「杉下なおみの会」を実施する。<通信 01.1989>によれば、杉下なおみはこの時緊縛モデルとなった女性の名であり、開催場所も彼女のマンションであったという。3回目の1986年2月2日会合から「緊縛美研究会」に改称、カメラマンである不二秋夫が事務を取り仕切り、4回目から会としての体裁が整ったという。月1回の例会開催に加え、1989年から『緊美研通信』を発行するようになる（～1999年、発行元：不二企画）。

『緊美研通信』は、年2～3回のペースで発行され、一見完全な緊美研の会誌のように見えるが、書店販売も行っていたらしく、書店で本誌を購入したことをきっかけに緊美研に入会したという会員からの投書も目立つ（価格は創刊号から最終号の23号まで2000円、128頁程度）。90年4月に発行された第4号には、例会は50回を数え、延べ参加者数は900名に達したと記述されている（83頁）。緊美研例会の参加者の多くが男性で、女性は多くとも数人だったと書かれているものが多い。モデルは基本的に女性だが、飯田氏が気に入ったモデルに限り、まれに女装男性を縛ることもあったという。

これらの活動に加えて、飯田は緊縛美研究会および不二企画を母体として、「緊美研ビデオ」として飯田が監修するオリジナルビデオを制作・販売し始める。さらに、緊縛以外のフェティシズムを主題とするレーベルとして「ライトブレン（右脳集団）」を立ち上げ、「女切腹」などをテーマとするビデオも販売し始める。ライトブレン第1作は、『女腹切り・散華』（春原悠理主演、30分15000円）であった。

飯田が制作したビデオは1999年までに300タイトル以上であった（飯田2013:5頁）。緊縛作品はすべて30分1万円、ライトブレン作品は1時間・2万円のものもあった。

この他、アートビデオ、シネマジック等においても緊縛ビデオの制作に関わり、多くの作品を送り出す。<仕事メモ>にすべての記載はないが、アートビデオは1983年、少なくとも10本の緊縛ビデオを制作しており、そのほとんどに飯田が関与したものと思われる。

## 【1990年～2013年】

1992年3月、29日、立ち絵「鈴ヶ森・白井権八」の台本を執筆と<仕事メモ 1992>にあるが、確認

できていない

1993年8月、飯田豊一「化けてでないか」（『ラッキーホラーショー増刊 11 宮』）

1993年9月、濡木痴夢男「濡木の縛り方講座」（『ニャン2倶楽部Z』1993年9月号）連載開始（～少なくとも2000年10月号）

1998年10月、濡木痴夢男「緊縛エロティシズム考」（『月光』10号）連載開始（～少なくとも『月光』9巻1号、11回）

1999年「縄炎—美濃村晃の世界」（吉村彰一監督、118分、シネマジック）に出演

2003年9月、飯田豊一「浪曲 人情深川夫婦甘酒」で、「第4回大衆芸能脚本募集—浪曲—」・佳作を受賞

2004年1月、濡木痴夢男「濡木緊縛日記」（『S & M スナイパー』2004年1月号）連載開始（～2009年1月号、全61回）

2006年1月、濡木痴夢男「緊縛ナイショ話」、オンラインで配信開始（～2009年12月、全297回）

2007年8月3日、濡木痴夢男「濡木痴夢男のおしゃべり芝居」オンラインで配信開始（～2013年7月13日、全215回）

2007年、田端六六「天狗のいたずら」で「第5回北区内田康夫ミステリー文学賞」・大賞を受賞

2008年3月 濡木痴夢男「前略、縛り係の濡木痴夢男です」（『SM ネット』）連載開始（～2013年月、全30回）

2008年5月、「縛師 -Bakushi-」（廣木隆一監督、94分、ジェネオンエンタテインメント）に出演

2009年9月、濡木痴夢男「濡木痴夢男の猥褻快樂遺書」（『ウェブスナイパー』）連載開始（～2013年7月）

2011年ともしび同人『ともしび写真集・夕日の部屋』発行

2013年9月、9日、永眠

飯田60代～80代。飯田豊一「化けてでないか」は、SMではなく、1945年3月の東京大空襲をテーマとするものである。飯田の著作中、1945年の出来事を直接描いたものは多くなく、貴重といえる。

「濡木緊縛日記」は、掲載誌『S&M スナイパー』（ワイレア出版）が2009年1月号を以て休刊したことを受け、全61回で終了した。同年9月より、同じくワイレア出版の運営する「ウェブスナイパー」で連載を開始した「濡木痴夢男の猥褻快樂遺書」が後継連載に当たる。これらの連載は1回が2頁程度と短いものだが、濡木が倒れる直前まで続けられた。2003年8月号から2007年9月号連載分は、『緊縛★命あるかぎり』としてまとめられ刊行されている。

2011年、81歳の飯田は早乙女宏美、山之内幸、中原るつとともにともしび同人を組織し、緊縛写真集『ともしび写真集1・夕日の部屋』を刊行する（B6版・34頁・2500円）。本作は、「決して現実世界では見ることでできない、物語の中でしか楽しむことを赦されない恐怖や絶望や悲しみに満ちたヒロイン」の姿を作り上げたい、「作りものを本気で作りたい」という動機のもと撮影されたもので、極々少数作成された（中原2012）。緊縛を女性への暴力から切り離そうとした飯田が、晩年、「プレイ」とは異なる暴力としての緊縛を作中で表現しようとしたことは興味深い。

2013年8月、飯田は倒れ、9月9日に83歳で永眠した。最後となった「濡木痴夢男のおしゃべり芝居」第215回の日付は7月13日であり、（つづく）と結ばれている。ウェブスナイパー連載の「濡

木痴夢男の猥褻快樂遺書」47回の日付は7月26日であった。(中原2006)の副題は「猛烈執筆人生」であるが、まさに死の直前まで書き続けた猛烈な人生である。

以下に単行本として刊行された飯田の著作一覧を示す。商業出版され、一般に流通したもののみを掲げている。これはあくまで筆者が現段階で把握しているものに留まる。選集等に作品が再録されているものも単行本の場合は含めている。

### 【飯田豊一氏単行本一覧】

- ・飯田豊吉『夜シリーズ 地獄の乳房』あまとりあ社、1958年
- ・飯田豊吉『裏窓叢書第1集 狂異地獄肌』あまとりあ社、1959年
- ・飯田豊吉『夜シリーズ 怪異愛霊教』あまとりあ社、1959年
- ・藤見郁『裏窓叢書第3集 地底の牢獄』あまとりあ社、1963年
- ・塔婆十郎『裏窓叢書第6集 地獄谷の女たち』あまとりあ社、1964年
- ・藤見郁・T. MORISITA『ショッキング画集 第一集』あまとりあ社、1964年
- ・青山三枝吉『SM選書第4集 夜のたわむれ』あまとりあ社、1966年
- ・塔婆十郎『SM叢書第7集 古城の幽鬼』あまとりあ社、1967年
- ・矢桐重八『S・M双書第2集 幽霊陰陽師』路書房、1969年
- ・矢桐重八『ハンディ SM文学 鬼女面地獄』耽美館、1969年
- ・藤見郁『ナイトブックス 54 縄と女と野獣たち』第二書房、1969年
- ・藤見郁『ナイトブックス 56 狂った縄』第二書房、1969年
- ・藤見郁『ナイトブックス 57 白い肌 黒い縄』第二書房、1969年
- ・藤見郁『ナイトブックス 58 縄の奴隷たち』第二書房、1969年
- ・藤見郁『ナイトブックス 60 縄にもだえて』第二書房、1969年
- ・藤見郁『ナイトブックス 61 縄は生きている』第二書房、1969年
- ・藤見郁『ナイトブックス 62 妖しい縄』第二書房、1969年
- ・藤見郁『ナイトブックス 濡れた縄』第二書房、1969年（※ナイトブックス通番不明）
- ・飯田豊太郎『怪談千一夜』潮文社、1970年
- ・藤見郁『ナイトブックス 64 恍惚の縄』第二書房、1970年
- ・藤見郁『SM耽美文学 第8 きちがい狼』耽美館、1970年
- ・白鳥大蔵『緋縮緬地獄』譚奇会、1971年
- ・飯田豊一『ハンディ SM文学 秘剣残酷囃子』耽美館、1972年
- ・濡木痴夢男『縄化粧』東京三世社、1988年
- ・秋田昌美著・濡木痴夢男監修・不二秋夫写真監修『日本緊縛写真史1』自由国民社、1996年
- ・濡木痴夢男『緊縛の美・緊縛の悦楽』河出書房新社、1999年
- ・矢桐重八「妖異お告げ狸」志村有弘編『捕物時代小説選集3』春陽堂書店、2000年
- ・矢桐重八「幽霊陰陽師」志村有弘編『捕物時代小説選集5』春陽堂書店、2000年
- ・藤見郁「お朧月夜笠」志村有弘編『捕物時代小説選集8』春陽堂書店、2000年
- ・飯田豊吉「往生組始末記」志村有弘編『怪奇・伝奇時代小説選集8』春陽堂書店、2000年
- ・濡木痴夢男『実録・縛りと責め』河出書房新社、2001年



- ・ 濡木痴夢男『性の秘本・責めと愉悦』河出書房新社、2003年
- ・ 濡木痴夢男『「奇譚クラブ」の絵師たち』河出書房新社、2004年
- ・ 濡木痴夢男『「奇譚クラブ」とその周辺』河出書房新社 2006年
- ・ 濡木痴夢男『緊縛★命あるかぎり』河出書房新社、2008年
- ・ 飯田豊一『「奇譚クラブ」から『裏窓』へ 出版人に聞く⑫』論創社、2013年

最後に、飯田氏との個人的な思い出を記しておく。筆者は、2006年頃から年に数度風俗資料館に通っていたが、その際にしばしば、楽しげに資料館館長と談笑する飯田氏をお見かけしていた。氏はいつも、資料館のカウンターにほど近いテーブルに座って、たわいのない話をされていた。当時の筆者は、飯田氏の『奇譚クラブ』関係の著書はもちろん読んでいたが、インタビューという手法に自信も信頼もない上、文字として残された資料にばかり関心が向いていたため、強いて飯田氏とかかわりを持つとは思わなかった。そのため数年間、氏と同じ空間に存在するだけの日々が続いた。

しかしある日、きっかけは覚えていないが、1度だけ、飯田氏と会話をする機会に恵まれた。どのような話をしたか全く覚えていないが、飯田氏はほがらかに対応してくださった。そして、出たばかりだというご著書『緊縛★命あるかぎり』に丸っこい字で「濡木痴夢男」とサインをしてくれ、それを私にくださった。飯田氏と筆者の接点は、これがすべてである。

生前の飯田氏と交流を持てなかったことは誠に残念であり、後悔していないと言えは嘘になるが、氏は膨大な著作を遺してくれている。未だ読み解かれていない多数の著作を前にして、飯田氏の不在を嘆くのはいささか氏に失礼であろう。飯田氏と対話することはまだまだ十分にできるのであり、それは今後何十年もかかる大仕事である。飯田豊一氏の冥福を心よりお祈り申し上げる。

### 3. 新出インタビューの内容

- ・ インタビューにおける、飯田氏の発言には【飯田】を付し、黒田氏の発言には「——」を付した。
- ・ インタビュー内容のうち、[ ]内は黒田氏による補足である。河原による補足は注にて示した。
- ・ 河原の判断で内容を省略した箇所には、\*\*\*を挿入した。
- ・ 飯田氏の発言内容には、一部差別的な内容が含まれるが、そのまま掲載した。
- ・ 『奇譚クラブ』や『裏窓』の投稿者・編集者の実名比定に論が及ぶ箇所については、実名と筆名はゴシック表記とした。

---

——飯田[豊一]さんは須磨利之さんとの面会を楽しみに久保書店へ通っており、その後、社員として久保書店へ入社されたそうですね。

【飯田】はい。そもそもは『奇譚クラブ』で見た喜多玲子の挿絵——須磨さんの絵ですね——に一目惚れし、小説を書いて須磨さんの挿絵つきで『奇譚クラブ』に載せてもらいたいと図々しくも考え、曙書房[当時の『奇譚クラブ』発行所]へ短編の原稿[「悦虐の旅役者」]を送ったんです。ちょうど、仕事の関係で東京を出て名古屋で暮らしていた時期だったので、名古屋と大阪[『奇譚クラブ』発行所は大阪

府にあった]なら近いという事もあって思いきったんです。数日して吉田さんから手紙と現金封筒が届きました。手紙には「須磨氏は一ヶ月ほど前に退社しました」と書かれていてガッカリしたんですが、誠実な返信に感動して吉田さんへ再び手紙を送り、なんとなく文通みたいな形で連絡を取り合うようになったのです。そうこうしているうち、須磨さんが大阪から東京へ引っ越され、久保書店が発行する『裏窓』という雑誌の編集に携わっている事を知り、僕も同時期 [1957] に東京へ戻って来たのでタイミングが良いと思い、「『裏窓』編集部 須磨利之さま」と須磨さんを指名して短編の原稿を送りました。

——須磨さん宛に原稿を送ったのは、いつだったか覚えておられますか。

**【飯田】** 1957年の夏でした。原稿を送った数日後、須磨さんから「原稿を読みました。是非、お目にかかりたい」という返信があり、9月に入った頃だったかな、江古田の久保書店を訪問しました。久保書店は閑静な住宅地にあり、出版社というより老舗の商家みたいな外観だったのを覚えています。

——飯田豊吉名義の短編「青い顔の男」が『裏窓』1957年12月号に載っていますが、この作品が須磨さんへ送ったという作品ですか<sup>14)</sup>。

**【飯田】** 確かそうだったと思いますが、ハッキリとは覚えていません。申し訳ない。

——飯田さんが久保書店へ入社されたのは1961年<sup>15)</sup>と伺いましたが、それ以前から原稿の持ち込みで久保書店へ定期的に通っておられたのですか。

**【飯田】** 日参ではありませんが、須磨さんと会いたいがために足繁く通っていました。編集部内でも、だんだん「須磨さんの客」というより「外部スタッフ」みたいな扱いになってきました。

——原稿の持ち込みは、どれくらいのペースでされていたのですか。

**【飯田】** 割と頻繁に持ち込んでいましたよ。一作書きあがるたびに久保書店まで出掛けていましたから、週1回ペースで通っていた時期もありました。最初の頃は須磨さんから「ここ [江古田] まで来るのに交通費が大変でしょう。何作か書き溜めてから郵送してくれてもいいんですよ」と言われましたが、須磨さんと会って話をするのが楽しかったし、話している時に小説のアイデアを思いつく事もあるので久保書店通いを続けました<sup>16)</sup>。

——『裏窓』には連載も含めて多数の作品を発表しておられますが、失礼ながら不採用になった作品というのがありますか。

**【飯田】** どうだったかな。たぶん、なかったと思います。僕が書いた小説を須磨さんは必ず絶賛してくれましたし、すぐに『裏窓』へ載せてくれました。僕の原稿を受け取った須磨さんは、「今回の作品も非常に面白いですね。ありがとうございます。原稿、確かに受け取りました」と言い、「ちょっと待って下さい。一緒に出ましょう」と言って来客用の長椅子に僕を待たせ、机の上をパッパと片付けて「お先にい」みたいな感じで他の編集部員に声をかけて仕事を切り上げるんです。その後、僕を新宿とか渋谷へ連れて行ってきて、行く先で晩ご飯をおごってくれました。

——次の作品に関する打ち合わせを兼ねた食事ですか？

**【飯田】** 食事しながら酒を飲んで、雑談するだけです (笑)。河出の本にも書いたけど、須磨さんにはおごってもらってばかりでした [『有形無形さまざまのものを (略) もらいっぱなしだった。そして (略) なに一つ、返していない』と証言。『奇譚クラブ』とその周辺 128頁]。恩返しする前に須磨さんは死んじゃったけど、僕が生きている間に少しでも須磨さんの業績を書き残しておきたいと思って、今、彼の評伝を書いています。ようやく全体の1/3近くまで書きあがりしましたが、まだまだ完成には時間がかかりそうです。400字詰め原稿用紙で136枚分あります。河出書房新社の編集部には福島紀幸さ

んからの原稿依頼で書き始めたのですが、現在、企画自体が白紙になってしまい、原稿を書いても出すアテがなくなってしまったので執筆が中断しています。[飯田氏が死去され、「評伝 美濃村晃」は未完の絶筆となりました。]<sup>17)</sup>

——飯田さんが久保書店を辞められた後、『サスペンス・マガジン』の編集人は片山博友という人物に変わっていますが、(持参した数冊の第2期『サスペンス・マガジン』を飯田氏へ提示)この方はご存知ですか？

**【飯田】** 片山博友は『マンハント』編集部にいた島本春雄さんの変名です。久保書店の社屋近くに片山橋という木橋があって[2020年9月現在もコンクリートの橋として現存]、その橋が変名の由来だそうです。

——片山博友は島本春雄さんだったのですか。このような変名があったとは知りませんでした。この名前では緊縛写真の演出担当もされていますね。

**【飯田】** (雑誌をめくりながら) ああ、ホントだ。『演出・片山博友』って書いていますね。(絵物語の作者名を目にして) あっ、この**荘徹也**も島本さんの変名だ。嘘は本当かわかりませんが、「今夜も徹夜かい？」と聞かれて「そう、徹夜」と答えたのがペンネームの理由らしいですよ(笑)。

——まるで阿佐田哲也[直木賞作家・色川武大の別名]のようですね(笑)。

**【飯田】** 本人から聞いた話だから間違いないと思うけど、酒の席だったから本当かどうか……(笑)。でも、島本さんは真面目な人だったからなあ。こればかりは冗談か本当か断言できません。

——いつ頃のお話ですか？

**【飯田】** 『あぶめんと』の廃刊が決まった頃だから、1970年の夏かな。島本さんの連載小説が中絶になるので、廃刊の報告と中絶のお詫びをしに、須磨さんと一緒に久保書店へ行った帰りです。三人で中野駅近くの酒屋で飲んだ時ですね。

——告げられた島本さんだけでなく、それを報告する須磨さんも辛かったでしょうね。

**【飯田】** うん。以前の同僚だし、創刊号からの連載陣として原稿を依頼していたからねえ。古巣の編集部に入った須磨さんは、まっすぐ島本さんの机に向かって行き、「島ちゃん、申し訳ない。『あぶめんと』が9月号で廃刊になるので、「紅蜘蛛伝奇」を最後まで載せられなくなってしまった」と頭を下げたんです。

——その事を聞いた島本さん、ご立腹されましたか？

**【飯田】** いや、怒っていませんでした。『あぶめんと』も『裏窓』みたく読者層が限られた雑誌だから、島本さんも須磨さんの苦勞を知って怒らなかつたと思います。須磨さんも島本さんも——僕が知る限りですが——温厚な紳士で、僕は二人が怒る姿を見た記憶がないです。

——「紅蜘蛛伝奇」は「被縛呪法」と改題のうえ、あまとりあ社の「SMノベルス」第7巻として単行本化されているので、作品自体は日の目を見えていますね。

\*\*\*

——『あぶめんと』ですが、これは何冊続いたのですか。

**【飯田】** 6冊です。久保書店を辞めた後、須磨さんが立ち上げた出版社<sup>18)</sup>から発行した雑誌です。『裏窓』時代と変わらず、須磨さん、僕、陽ちゃんの三人で力を併せて作っていましたが短命に終わっちゃったなあ。誌名の由来は「アノブーマル声明(ステートメント)」の略だったと記憶しています<sup>19)</sup>。執筆メンバーも久保書店時代の人脈を活かして集めました。話は変わるけど、『SMコマンド』って雑誌、知ってますか？

——はい。1981年に創刊された久保書店発行の雑誌ですよ [1981年1月号～6月号の全6冊で廃刊。同誌の廃刊以降、2020年10月現在まで久保書店はSM系雑誌を発売していない]。

【飯田】 その編集長も**荘徹也**、つまり島本さんなのですか<sup>20)</sup>。

——『SM コマンド』は島本さんが編集されていた雑誌だったのですか。

【飯田】 そうです。話を『裏窓』に戻しますが、僕も詳しくは知らないけど、島本さんは『裏窓』に幾つかの変名で原稿を書いていた。(机に乗っている『裏窓』の何冊か手に取り) ここ [目次] に出ている名前だと、志摩基治が島本さんの変名ですね。

——**志摩基治**の名前は『サスペンス・マガジン』でも緊縛写真の演出担当としても使われていますね。やはり島本氏の別名でしたか。似たような名前だったので、もしかして、とは思っていましたが……。

【飯田】 島本春雄と志摩基治。あんまり変わらない名前だよ (笑)。あッ、この**志摩不二**<sup>21)</sup>も確か島本さんの別名です。

——黒髪フェチの小説を書いた志摩不二も、島本さんのペンネームだったのですか。伝奇時代小説を書いている**高木竜二** [または“龍二”]、サスペンス・スリラー物を書いている**神行京一**も島本さんのペンネームだと思っているのですが、この名前にお心あたりはありますか？

【飯田】 いや、ちょっとわからないなあ。僕が入社してからの『裏窓』では聞いた覚えがない名前です。

——『裏窓』は内部原稿が多かったようですが、それを許す久保書店の社風は大らかだったのですね。

【飯田】 まあ、大らかと言えば大らかでしたね。須磨さんの話では、社長の久保 [藤吉] さんは単行本や雑誌が売れさえすれば、わりと自由にさせてくれたそうです。だから僕も入社後は幾つも変名を使って小説を書きまくりました。

——原稿料は毎月の給料に加算されていたのですか？

【飯田】 給料とは別に原稿料を貰っていました。『裏窓』に限らず、編集部員はペンネームで小説を書いた場合、小説の原稿料は自分で経理へ行って受け取る事になっていました<sup>22)</sup>。僕が久保書店へ入社する前は須磨さんから手渡しで原稿料を貰っていました。

——「1ヶ月に社内原稿は何点まで」という制限はあったのですか。

【飯田】 いや、そういう制限はありませんでした。特殊な雑誌だから、逆に原稿が足りない事の方が多かったです。実際、僕が『裏窓』編集長になってから、須磨さん、僕、それから1963年に入社した**椋陽児**の三人で数十ページ分を埋めた事があります (笑)。

——それは凄いですね。

【飯田】 自分好みの小説を書きたいという気持ちがあったから書けたんですよ、僕も須磨さんも、そして陽ちゃん [椋陽児] も。

——島本さんが後期の『サスペンス・マガジン』へ発表した作品には剃毛や浣腸ネタがよくでてきますが、そういったアブノーマルな趣味というか趣向に関心があり、島本さんも自分で書きたいものを喜んで書いていたのでしょうか。

【飯田】 どうかなあ、その点については僕からは何とも言えないなあ。ただ、島本さんがアブノーマル趣味に対して淡泊というか興味がないという感じはしました。須磨さんも『島ちゃんの小説 [『裏窓』に連載された「隠密覚書」の事] はダメだね、小難しく面白くない』と言っていたのを覚えていま

す。

——そうでしたか。

**【飯田】** 島本さんが事実上の編集長をしていた『耽奇小説』って雑誌に僕も原稿を書いた事があるんですよ。原稿を見た島本さんは「これは面白い作品ですね」と言っていたのに、雑誌へ載せる時には責め場をカットしちゃったんだ。スペースの都合だったか、作中に責め場は不要だと判断したのか、今となっては確かめようもないけど、たぶん後者だったんだらうね（苦笑）<sup>23)</sup>。僕は久保書店に入ってから島本さんとは特に付き合いがなかったから、彼の事はよく知らないのです。島本さんも僕の事を後輩社員程度の認識しかなかったのかも（苦笑）

——島本さんが荘徹也の名前で編集長を務めた『SM コマンド』は1981年6月号で廃刊となりましたが、同号の「編集後記」には廃刊を伺わせる文言がありませんし、原稿募集の広告も出ています。編集部としては7月号も出すつもりだったのでしょうか。

**【飯田】** その頃になると島本さんだけでなく久保書店とも付き合いがなくなっているから、僕にはわかりません。6月号の入稿後に久保さんから「『SM コマンド』は売れ行きが悪いから6月号で廃刊にする」と言われたんじゃないですかね。

——なるほど。『ハードボイルド・ミステリイ・マガジン』『マンハント』の改題雑誌も1964年1月号で急遽廃刊になったそうですから、『SM コマンド』も久保さんから突然の廃刊通告があった可能性は高いですね。

**【飯田】** 久保さんも商売で雑誌を出していたわけだから、採算問題についてはシビアだったんでしょう。それに昭和50年代後半は似たような雑誌の乱立時期だったし、正直、この雑誌『SM コマンド』は読んでみてもマニア臭というか、マニアに訴えかける情熱が感じられません。前触れなく廃刊となって短命に終わったのも頷けます。

——この他、島本さんについてご存知の事はありますか？

**【飯田】** 終戦直後、島本さんは京都に住んでいたみたいだけど、いつ頃か大阪に引っ越したらしいんです。僕も詳しい事は知らないけど、仕事を失ったらしく、大阪在住時の島本さんは非常に貧しかったです。そういう階級の人たちが暮らす地域に住んでいたみたいで、それを見かねた須磨さんが島本一家を上京させ、島本さんを久保書店へ入社させたと聞いています。なので、島本さんが上京したのは須磨さんより数年遅い、1956年の暮れじゃなかったかな。

——須磨さんと島本さんが知り合った経緯はご存知ですか？

**【飯田】** 杉山清詩さんを通じた知り合いだったそうです。ご存知ですか、杉山清詩。

——はい。「『オールロマンス』事件」[京都市役所衛生課臨時職員・杉山清次が『オールロマンス』1951年年10月号に杉山清一名義で発表した小説「特殊部落」が差別小説だと問題視された事件。詳細は、平野一郎『オール・ロマンス事件 差別行政の糾弾逃走』等を参照]の杉山清詩さんですよ。

**【飯田】** これは僕の想像だけど、京都市役所で衛生関係の仕事をしていた杉山さんは島本さんが苦しい生活を送っているのを見かね、懇意だった須磨さんに相談したんだと思います。杉山さん自身、「『オールロマンス』事件」で職を失ってから、須磨さんの口利きで大阪や京都で出ている雑誌へ書いて原稿料を貰い、それで生活費を工面していた時期があった<sup>24)</sup> ようですから、須磨さん頼りではあったけど、自分がされた事を島本さんにしてあげたんじゃないかな。

——杉山さんと島本さんの関係については、さすがに飯田さんでもご存知ありませんよね。

**【飯田】** ええ、僕も知りません。ただ、久保書店へ入社する前、須磨さんのお供で夕食に同行した際、

一度だけ、上野で杉山さんと会った事があります。須磨さんと面識ができた直後だった筈だから、おそらく1957年か1958年ですかね。

——1957年ならば、杉山さんは『裏窓』に「青線」という小説を発表[1957年7月号]しています。杉山さんのお顔を、飯田さんをご存知でしたか。

【飯田】いえ、知りませんでした。須磨さんが「こちらは杉山清次[杉山清詩の本名]さん。僕が京都にいた頃の知り合いで、『奇譚クラブ』が大判のカストリ雑誌っぽい体裁だった頃に杉山清詩とか加茂川清子の名前で短編を書いていた方です」と紹介してくれたのです。

——加茂川清子と杉山清詩は同一人物だったのですか。

【飯田】須磨さんの話によればね。僕は杉山さんと初対面でしたし、飲み食いしている時も、あまり彼とは会話しなかったので直接聞いたわけではありません。

——『奇譚クラブ』に載った加茂川名義の作品には「爆弾娘シリーズ」があり、杉山さんの著作にも同じヒロインが登場する短編があるので、加茂川清子は杉山清詩のペンネームではないかと思っていましたが……。ご自身の証言ではないそうですが、杉山さんと親しかった須磨さんの発言であれば、加茂川清子＝杉山清詩と断定して間違いなさそうですね。

【飯田】断定して間違いないと思います。島本さんは久保書店入社後、まずは『裏窓』編集部へ配属されたそうです。その後、本誌から増刊の編集に廻され、『裏窓』増刊から独立した『耽奇小説』の編集長になりました。『耽奇小説』は確か半年くらいで廃刊したんじゃないかな

——1958年9月号が独立創刊号です。1959年2月号で廃刊しています。

【飯田】『裏窓』っぽさを残した探偵小説雑誌を目指したのが仇になったのかもしれないね。僕の感想だけど、『耽奇小説』は『探偵実話』とか『探偵倶楽部』みたいな通俗性って言うのかな、露骨なエロにも特殊性癖のエロにも振り切れない中途半端さがありました。

——『耽奇小説』は『裏窓』増刊号として4冊発行された後、独立して新雑誌として創刊されています。増刊号時代は中田さんが、独立直後は松本祐三という方が、それぞれ編集人として奥付にクレジットされています。この2人の間柄はご存知ですか。

【飯田】松本祐三は『あまとりあ』の編集部員で、[中田]雅久さんガキユー[正しくは「まさひさ」。]とも親しかった編集者です。

——『裏窓』の本誌と増刊、『耽奇小説』の人事というか、編集スタッフの遍歴について、ご存知の事があれば教えて下さい。

【飯田】それでは『かっぱ』の創刊から『耽奇小説』廃刊に至る流れをざっくりと説明しますので、あなたも知っているであろう事を含んでいるかもしれませんが聞いて下さい。まあ、ほとんどが須磨さんから聞いた話の受け売りになりますが。

『あまとりあ』の廃刊[1955年8月号]後、久保さんは雅久さんと一緒に『あまとりあ』時代の人脈を活かし、その後続となる新たな定期行物として『裏窓』を創刊[1956年1月号]させました。最初は『かっぱ』という名前でしたが、カッパノベルスを出している光文社から注意を受け、半年も経たないうちに『裏窓』と誌名変更した[正確には1956年9月号より『裏窓』と改題]のです。『あまとりあ』からの天下り——というのは変かな——で『裏窓』編集部へ配属されたスタッフが雅久さんと松本さんです。創刊当初は実話系雑誌だった『裏窓』ですが、やがて須磨さんの目指していた文芸誌へとスタイルが変わっていき、それと同時に『裏窓』は増刊[「よるとひる」「よるもひるも」「ムード」と副題が一定しなかった。最後の「ムード」だけは2冊発行された]を2～3ヶ月に1冊というペースで

出すようになりました。須磨さんは本誌の、雅久さんは増刊の、それぞれ編集代表となったのですが、須磨さんと雅久さんは雑誌作りの方向性が合わなかったらしく、それを察した久保さんが本誌と増刊で別々の編集代表を立てたようです<sup>25)</sup>。小説主体の本誌、読物やコラムが主体の増刊と、最初の頃は住み分けができており、執筆メンバーも本誌は須磨・島本人脈、増刊は中田・松本人脈でしたが、通俗版『あまとりあ』とも言えるような内容だった増刊号は売れ行きが悪かったのか、5冊目からは本誌と同じ判型〔A5判〕にし、大衆小説誌らしい『耽奇小説』というタイトルで小説主体の紙面構成へ移行したそうです。そのため須磨・島本人脈の執筆メンバーが増刊にも書くようになりました。

——それまで自分の人脈で執筆メンバーを集めていた中田さんからすれば、増刊にまで本誌編集部の人脈による執筆者が派遣——というのは適切な言い方ではありませんが——されるのは面白くなかったのではないのでしょうか。

【飯田】 たぶんね。

——『耽奇小説』になってからも、編集メンバーは『裏窓』増刊時代と変わらなかったのですか。

【飯田】 相変わらず雅久さんを中心とする『あまとりあ』の残党メンバーが引き続いて担当していました。あッ、残党は失礼だったかな。僕は『あまとりあ』が好きじゃなかったから、どうも辛口になっちゃうんだようなあ（苦笑）。やがて『マンハント』が創刊〔1958年8月号〕され、少し遅れて『耽奇小説』も不定期の増刊扱いから月刊誌として独立創刊し、久保書店は『裏窓』、『マンハント』、『耽奇小説』という、ジャンルが異なる3つの文芸雑誌を持つようになりました。

——総合文芸誌が『裏窓』、海外小説の翻訳が『マンハント』、推理小説が『耽奇小説』というわけですね。

【飯田】 そうです。モダンな海外小説の雑誌という事で、『新青年』編集部にいた実績から雅久さんが『マンハント』の編集長に抜擢されました。松本さんも雅久さんの推薦で『マンハント』編集スタッフとなり、副編集長みたいなポジションに就いたと聞いています。

——『マンハント』と『裏窓』増刊時代の『耽奇小説』は半年ばかり発行時期が重なりますが、中田さんは『マンハント』の編集長をしながら『耽奇小説』の編集長も兼任したのですか。

【飯田】 増刊時代も独立創刊後も『耽奇小説』は島本さんが事実上の編集責任者だったと聞いています。彼は関西探偵作家クラブ〔1954年に探偵作家クラブと合併し、日本探偵作家クラブ関西支部となる〕の会員だったので、雅久さんも安心して編集長業務を任せられたんじゃないですかね。

——独立新創刊の『耽奇小説』も松本さんが編集人としてクレジットされていますが、実際は島本さんが編集長だったという事ですね。それで同誌の「編集後記」を島本さんが書いていた理由がわかりました。

【飯田】 そうです。素直に島本さんの名前を編集人として表記すればいいのに、変ですよ（1959年になってから、『耽奇小説』奥付の編集人は島本春雄に変更されている）。『耽奇小説』の廃刊後、編集メンバーは全員『マンハント』編集部へ異動となりました。

——『耽奇小説』編集部が解体され、『マンハント』編集部に合併される形になったわけですか。

【飯田】 そうです。ざっくりとした説明ですが、以上が『かっぱ』創刊から『耽奇小説』廃刊までの人事的な話です。

——なるほど。それで島本さんが『マンハント』編集部配属された理由がわかりました。

【飯田】 島本さんについて僕が知っている事は、これで全部です。あッ、あとひとつ。僕と須磨さん、陽ちゃんが久保書店を辞めた後、1971年に『サスペンス・マガジン』が復刊〔『サスペンス・マガジン』は1969年に一度休刊したんだけど、僕に代わって、島本さんが編集長になったの。アブノーマル雑誌に興味なかった島本さんが編集長になったんで、不思議に思ってね、須磨さんが「島ちゃん、今度、『サスペンス・マガジン』の編集長になったそうだけど、こっち系の雑誌に興味あったっけ？」と聞いたところ、「いえ、編集長だと給料に多少の上乗せがあるので」って短く答えたんです（苦笑）。〔追記1〕その後の調査によって、高木竜二も神行京一も島本春雄のペンネームだと確認できました。その経緯と検証内容については、拙稿「島本春雄のペンネーム（1）——神行京一と高木竜二（『SR-MONTHLY』391号・2013年12月発行）で詳述しています。

〔追記2〕2012年の夏、ある芝居会場でお目にかかった際、「島本さんは不知火妖之助という時代小説の登場人物みたいな名前も1回だけ使っていたのを思い出しました」と教えて下さり、調べた結果、このペンネームで書かれた「過ち」（『SMマガジン』1976年12月増刊号）という作品が見つかりました<sup>26)</sup>。

〔追記3〕飯田氏の死去後、『裏窓』の「未掲載原稿一覧」（原稿募集広告に応じて『裏窓』へ投稿されながら掲載には至らなかった作品一覧）に東京都からの投稿者として志摩不二の名前が載っているのを確認しました。志摩不二が外部投稿者だったのか、島本氏の別名だったのか、今となっては事実確認ができません。ただ、昭和40年代になると島本氏は剃毛趣味が色濃い作品（小説や絵物語原作）を書いており、黒髪へのフェティシズムが剃毛のエロチシズムになったとも考えられます。]

——『奇譚クラブ』、『裏窓』、『サスペンス・マガジン』を持てるだけ持ってきましたので、「このペンネームは知っている」という名前があったら、差し支えない範囲で教えていただけますか。

【飯田】 どれも懐かしい表紙だ。おッ、植草〔甚一〕さんや小実さん〔田中小実昌〕、〔山下〕愉一さんが書いてるな。島本さんや南郷〔京助〕さんの名前もある。そうだ、ペンネームの確認でしたね。ええとね、豊田一狼、市川国彦、青戸八郎、春川光彦、藤木仙治、天町五郎、佐伯邦夫、柳沢四郎、五所章（ごしょ・あきら）は僕です。須賀敏は須磨さん。「素寒貧＝すかんぴん」を名前にするなんて、須磨さんらしいよね。あッ、豊中夢夫は陽ちゃんだ。奥さんの夢子さんは豊満な肉体なので「豊満な肉体の夢子に夢中」という意味でつけたそうです。そうそう、喜多玲子も須磨さんの奥さんが玲子って名前だからペンネームを玲子にしたって聞いたなあ（笑）。

——椋さんといい、須磨さんといい、奥様の名前をペンネームに取り入れているのですね。

【飯田】 岡乃武也、浦岡乃武也、岡鬼一は万里小路崑。彼は広島の記事作家で、万里小路は京都の地名、崑は古い神社から採った名前です。その他にも安芸蒼太郎という名前を使っていました。この名前は安芸の宮島が由来だそうです。そうそう、吉岡乃武也の名前で地方紙に長編——確か歴史小説だったかな——を連載した事もあるそうです。

——2009年に風俗資料館で聞いたお話によれば、『裏窓』が摘発された際、警察は押収した住所録から寄稿者に電話をかけまくり、そのせいで万里小路さんご家族から「夜中に何か書いていると思ったら、そんな怪しい小説を書いていたのか」と批難されたそうですね〔『奇譚クラブ』とその周辺』236頁〕。

【飯田】 そうなの。警察での事情聴取が終わり、夜遅くに久保書店へ戻ってきたら電話が鳴った——たぶん、何度もかけていたのかな——ので出てみると、万里小路さんから、「ちょっと前に警察が



来ましてね、いろいろと『裏窓』の事を聞かれました」と困惑したような声で言ってきたのです。

——『裏窓』への寄稿が原因で警察が自宅に押し掛けてきた事、万里小路さんは怒っていらっしやいましたか？

【飯田】電話越しの口調では怒っている感じはしませんでした。ただ、困惑というか、アブノーマルな小説を書いていた事が家族にバレて居心地が悪そうでしたね。

——万里小路さん以外にも警察が自宅に押し掛けてきた投稿作家もいると思いますが、そういった方からお叱りの電話や手紙はありましたか？

【飯田】多少はありましたが、『裏窓』に原稿を書いたせいで自宅へ警察がやってきた。もう二度と変態雑誌に原稿は書かない」みたいに絶縁を宣言するような人はいませんでした。これについても河出の本に書いていますが[『奇譚クラブ』とその周辺』235頁]、モデルの月田京子からお叱りの電話があったものの、彼女も一時的にカーツとなっていたらしく、しばらくしてお詫びの電話をした時は気にしていない様子でした。あくまでも僕が電話で受けた印象ですけど。

——みなさん、反骨精神の持ち主だったのですね。すみません、話の腰を折ってしまって。それではペンネームの話の続きをお願いします。

【飯田】淡路周五は投稿作家で、名前からもわかると思うけど淡路島の人です。彼は多作家でね、しょっちゅう原稿を送ってくるので、久保書店の玄関に入ってすぐの階段を上がったところ、編集部の入り口前[旧社屋の久保書店は一階が製本所、二階が編集部となっていた]には淡路周五の作品を置くための長机が置かれていたくらいです。

——淡路周吾も同一人物ですか？

【飯田】同一人物です。彼は山本周五郎の大ファンだったそうで、そこから周五というペンネームを思いついたそうです。加葉好一（かば・こういち）も投稿作家で、文津部三郎（ふみつぶ・さぶろう）という名前も使っていました。彼は太った女性が好きな人でね、僕も本人と会った事があるんだ。マゾヒスト性癖があって、太った女性の尻に踏みつぶされたいという願望から「ふみつぶされそう→ふみつぶ・さぶろう」という名前をつけたそうです。「かば・こういち」という名前は、彼曰く「カバのように太った女性が好きだから」だそうです。鳴滝三郎、小田桐爽、海老沢七郎は鈴木和夫という人物のペンネームで、彼は映画会社の松竹に勤めていました。気さくな人で須磨さんと仲がよく、僕も何度か一緒に食事をした事があります。僕が『裏窓』編集長になった頃、「裏窓ちゃんねる」という穴埋めコラムへの原稿を鈴木さんに頼んだ事があります。鳴滝三郎は「なるべく（仕事を）さぶろう」という洒落でつけた名前だそうです。『奇譚クラブ』の懸賞小説[同誌1959年11月号掲載の「一筋縄では駄目な娘」女はそれでも我慢が出来る]へ募集する時に思いついたとか言っていたなあ。

——小田桐爽のペンネームは[植物の]弟切草が由来でしょうか？

【飯田】小田桐爽については知りません。でも、鈴木さんは映画の脚本を書いていたせいか博学な人だったから、そうかもしれないね。九十九十郎、珠洲九（すず・きゅう）、八巻令、三鬼俊は、いずれも千草忠夫の別名義です。千草さんは石川県珠洲市に住んでいて、金沢市内の女子高で英語教師をしていました。そこから僕が珠洲九という名前をつけたのです。九十九十郎は、九十九湾をイメージして須磨さんがつけた名前です。

——[珠洲]九という名前は、どういう経緯でつけられたのでしょうか。

【飯田】当時の住所からですね。九番地に住んでいたので「九」とつけました。

——地名をペンネームにされる方、意外に多いのですね。

【飯田】そうですね。僕も〔千葉県〕松戸市矢桐町十八番地に住んでいた頃、**矢桐重八**っていう名前を使っていたから（笑）。**鹿火屋一彦**（かびや・かずひこ）と**真野麗**は同一人物ですね。鹿火屋はソドミアの大家で、僕も彼から原稿を貰った事があります。そうそう、彼から原稿を貰った時のエピソードで忘れない事がありましてねえ。受け取った原稿に目を通したら、「あれっ、どこかで読んだ覚えがある文章と内容だな」と思ったので、うっかり「この原稿、過去にも使っていましたね」みたいな事を口走っちゃったんです。そうしたら鹿火屋さんは「だからどうした。雑誌が違うんだし、同じテーマの原稿なんだから文章や内容が似ていても当然だろう」って激昂しちゃってね。それ以来、「ホモの人は怖い」っていう刷り込みがでちゃいました。こう言うとソドミアの人からは偏見だと怒られるかな（苦笑）。

——「だからどうした」とは豪快な返しですね（苦笑）。

【飯田】**葉山潤平**は**葉田光**の別名で、あまとりあ社から葉田名義の単行本『夜光裸身』を出しています。**橋新太郎**は『マンハント』編集部の**長谷川勇**。**水尾究**（みずお・きわむ）と**阿麻哲郎**は**天野哲夫**。水尾究は「M = マゾを究める」という意味で僕がつけました。天野さんはマゾヒストだったから。**鳴山能平**は時代小説家の**鳴山草平**。鳴山さんは確か須磨さんの知り合いで『奇譚クラブ』や『裏窓』に古くから不定期で寄稿しています<sup>27)</sup>。**戸山一彦**、**とやまかずひこ**、**K・トヤマ**は**野坂昭如**さんだ。トヤマハイツに住んでいたので『トヤマ』をペンネームに使っていたんです。**松井六郎**は**片岡義男**さんですね。この「さすぺんす・すくりーん」〔『サスペンス・マガジン』1966年1月号掲載〕を書いた**青戸八郎**も片岡さんだった筈です。**古巢夢太郎**は**西村亮太郎**の別名で、彼はあまとりあ社や久保書店から何冊も単行本を出しており、その関係で『裏窓』とか『サスペンス・マガジン』に時代小説を書いていました。僕の記憶だと古巢夢太郎の名前は雑誌でしか使わず、古巢名義では単行本を出していなかったと思います。

——1953年の『宝石』〔1956年創刊の探偵小説専門誌。1964年廃刊〕に載った懸賞短篇コンクールの予選通過一覧には**戸山一彦**という名前が見られますが、この投稿者も野坂さんなのでしょうか？

【飯田】さあ、どうかなあ。そこまで古い話になるとわかりません。ただ、野坂さんはSFとか探偵小説に興味があったみたいだし、僕と同じ1930年生まれだから、1953年ならば年齢的に小説を投稿していてもおかしくないね。

——**沼正三**は**天野哲夫**さんの別名で間違いありませんか？2011年の暮れ、『裏窓』投稿時に使用していたペンネームを教えていただくため、新宿で〔脚本家の〕**石森史郎**さんと新宿で面会した時に「新潮社で校正をやっている天野哲夫さんとは面識があって、いつだったか、沼正三という名前が刷られた名刺をもらいました」と聞いたのですが……。

【飯田】沼正三ねえ。この名前は複雑なんだよなあ。どこかに真実というか詳細を書き残しておきたいけど、なかなか時間がとれなくて。

——沼さんの著書『懺悔録 我は如何にしてマゾヒストとなりし乎』のイントロダクションには、**倉田〔卓次〕**さんが『判例タイムス』に寄せた文章を根拠に「天野哲夫が沼正三であることを明言した。すでに八十代となった倉田の率直なこの文章を含めた本も上梓された。これで三十年以上の論争に決着が着くだろう」と書かれています。

【飯田】その文章は誰が書いているの？

——志賀信夫という方です。奥付の略歴を見ると舞踏関係者のようです。

【飯田】どれどれ、ちょっと読ませて下さい。（しばらく本を読み）なるほどねえ。この文章を書いた

人はアブノーマル雑誌の世界に詳しくないようだし、その奥深さも知らないだろうから、沼正三問題の当事者である倉田さんの文章を無条件で信じちゃうのも仕方ないか。たぶん、倉田さんの証言だけを読んで満足し、「家畜人ヤプー」に関わっている人たちへの調査も碌にしないまま「三十年以上の論争に決着が着くだろう」って書いたんだろうなあ。もっとも、この人が「家畜人ヤプー」の周辺関係者にインタビューを試みても真実は聞けなかったかも知れませんが（苦笑）。

— どういう事でしょうか？

【飯田】 僕や須磨さんに限らず、アブノーマルな雑誌に関わっている人間は基本的に信頼できる相手でないとなんか話を話しません。この人みたく興味本位で沼正三問題に近寄ってくる人は軽くあしらわれるか、一般に流布している表面上の事実を吹き込まれるだけです。

— そうしますと、倉田さんが『判例タイムス』へ書いたという文章には虚偽があったという事でしょうか。

【飯田】 倉田さんがどんな事を書いているかは知らないけど、「自分は沼正三ではない」という言葉が100%嘘というわけでもないのです。

— なんだか複雑で情報整理が追いつきません……。

【飯田】 「家畜人ヤプー」の実作者は天野哲夫じゃない、とだけ今は言っておきますが、沼正三の正体については、いずれ、あなたに詳しい事をお話しします<sup>28)</sup>。

— 次の機会に詳しい事を教えて下さい。あと、私が気になっているのは吾妻新という作家です。

【飯田】 吾妻新は村上信彦という人物です。

— えっ、吾妻新の正体は村上信彦 [服装史・女性史研究家。探偵小説の著作も何作かある] だったんですか。

【飯田】 そうです。彼が『裏窓』に原稿を書いていたかは思い出せないけど、『奇譚クラブ』に長編小説や翻訳がずいぶんと載っていた筈です。

— 所持する『奇譚クラブ』を調べてみたのですが、1953年から1955年にかけて精力的に寄稿されています。持っていない号も多々あるので確実な数字ではありませんが、長編小説1作、翻訳2編、読物類が8編確認できました。これが(自作のリストを取り出し)吾妻新の作品リストです<sup>29)</sup>。

【飯田】 ちょっと拝見。(リストを見て)なるほど、思ったよりも少ないですね。僕の記憶だと、かなり書いていた覚えがあります。

— 『裏窓』の投稿作家や変名作家については以前にお話いただきましたが、飯田さんが編集業に関わっていない『奇譚クラブ』の投稿作家についてはどうでしょう。

【飯田】 (昭和20年代後半の『奇譚クラブ』をめくりながら)吉田 [稔] さん [『奇譚クラブ』発行人] も須磨さんも『奇譚クラブ』の寄稿者についてはガードが堅く、僕にも「〇〇というのは××に住んでいる投稿者です」みたいに素性を明かす事はしませんでした。二人とも、雑談している時にポロッと漏らす事はありましたが、それでも「▲▲号に載っている〇〇は\*\*という作家の別名で、こういう内容の原稿を書いてくれた」という感じで著名作家の別名を話す以外、『奇譚クラブ』の一般投稿者については決して個人情報をお口にしませんでした。著名作家の別名を明かす事も珍しく、僕の覚えている限りでは2、3回しかなかったね。だから『奇譚クラブ』の一般投稿者や著名作家の変名についてはよく知らないし、逆に言えば、あまり聞かない話題だからこそ聞いたなら忘れずに覚えているのかもしれない。

——吾妻新と村上信彦が同一人物だというのは、どういう経緯で知ったのですか？

【飯田】 1958年の11月上旬だったかな、大坂の吉田さんから『奇譚クラブ』の（通巻100号記念懸賞）公募企画に投稿された作品、残念ながら掲載に値するものがなかったので、飯田さんが書いた「乳房に火をつけるな」<sup>30</sup>を当選作として連載したいのですがよろしいですか」という連絡をもらい、了承の返事をしたんです。数日後、例によって久保書店へ原稿を届けた帰り、須磨さんと新宿で飲んでいる時に「吉田さんから連絡があって、僕が書いた長編を懸賞入選作として『奇譚クラブ』で連載してもらいました」と話したのがキッカケで『奇譚クラブ』の思い出話が始まったの。その時、「『奇譚クラブ』に吾妻新ってという作家がいたんだけど、彼は短期間で消えちゃった。いい小説や読物を書く人だったんだけどね。その吾妻新って、服装史研究家の村上信彦の変名なんだ」と須磨さんが言ったんです。

——二人が同一人物である事を、須磨氏は吉田氏から聞いたのでしょうか。

【飯田】 さあ、どうかなあ。吾妻新が活躍していた時期は1953年から1955年とおっしゃいましたね。

——はい。

【飯田】 その頃だと須磨さんも吉田さんを手伝って『奇譚クラブ』の編集業務に関わっていたそうだから、それで内部事情を知っていたのかもしれない<sup>31</sup>。いずれにしろ、吾妻新が村上信彦なのは間違いありません。

——松井籟子は正真正銘の女流作家との事ですが、何者なのですか。大阪で役者をしていた時期があるようですが。

【飯田】 彼女の本名は坂本嘉江というそうです<sup>32</sup>。僕も須磨さんに同席して2、3回しか松井さんとは会った事がないので素性や経歴は知らないのです。

〔追記〕 残念ながら、インタビュー本の発売を待たずして飯田さんは病没され、沼正三の正体について教えていただく機会は逸しましたが、2015年、薔薇十字社の代表取締役だった内藤三津子さんから沼正三という作家に関する真実を聞く事ができました。内藤さんのお話によると、倉田氏は自身が沼名義で書いた作品に関する一切の権利を天野氏へ譲渡したそうで、その中には「家畜人ヤプー」を書いたという事実＝実績も含まれているそうです。松井籟子の略歴については、黒田明「続・探偵作家の足跡」（『新青年』趣味 第20号／2020年4月発行）をご参照下さい。〕

——ペンネーム関係の話として、ついでと云っては失礼ですが、この本（飯田豊太郎『怪談千一夜』〔潮文社、1970年4月〕）について、聞きたい事があります。奥付の著書紹介文には「著書に「怪異愛霊教」「地獄の乳房」「秘剣残酷囃子」と書かれています。これらは飯田[豊一]さんの著書ですよ。飯田豊太郎というのは飯田豊一さんの別名なのではないでしょうか。1905年生まれと書かれているので別人とは思いますが……。

【飯田】 飯田豊太郎は僕の親父です（笑）。

——お父様のお名前だったのですか。

【飯田】 親父は妖怪研究者でしたが、体調を崩していた時期、僕が親父の名前で原稿を書いた事があります。代筆ってやつですね。これ『怪談千一夜』ではありませんが。

——「怪談千一夜」は飯田さんが市川国彦の名前で『サスペンス・マガジン』への連載をまとめたものですね。

【飯田】 そうです。当時、僕は伝承や伝説、歴史に興味を持っていたので日本各地の伝説や歴史に関する本を買い込んでいました。最初は伝奇時代小説の参考資料になればと思っていましたが、それ

らを読んでいるうちに日本各地の奇妙な伝承や伝説を読物風にかきたくなり、「怪談千一夜」の連載を始めたのです。

——飯田さんがお父様の名義で単行本を出した経緯を教えてくださいませんか。

【飯田】潮文社の編集部から親父宛に著書出版の打診があったんですが、さっきも言ったように親父が体調を崩していた時期だったから、僕の「怪談千一夜」を本にしてもらう事になりました。それを親父の名前で出版したんです。僕の名前で出してもよかったんだけど、先方〔潮文社〕は親父をご指名だったので自分の著作を父親の著作物として提供しました。もともと怪談や民話にも興味は持っていたし、「怪談千一夜」は力を入れて書いたものだから単行本になっても読み応えがあるという自信はありました。

——この他にも潮文社から飯田豊太郎名義の単行本が2冊〔『妖怪千一夜』と『幽霊千一夜』〕発売されていますが、これらも実作者は飯田〔豊一〕さんですか？

【飯田】いいえ。『妖怪千一夜』と『幽霊千一夜』は、親父が書いた作品を収録している筈です。

——それで謎が解けました。

【飯田】（『怪談千一夜』の奥付を見て）あッ、当時の僕の住所が親父の住所として掲載されている（笑）。

——〔千葉県〕松戸市矢桐町十八番地ですか？

【飯田】うん。あれッ、そうすると、奥付の略歴とか現住所を書いたのは僕だったのかな。親父の略歴も僕が書いたのか……。笑ってる場合じゃないぞ、思い出せないや。

——飯田さんが使用されたペンネームの由来を教えてくださいませんか。数多くのペンネームを持っていらっしゃるの、覚えているだけでよいのですが。

【飯田】えッ、僕のペンネームの由来ですか。思いつきっていうか、閃きっていうか、あまり深く考えずにペンネームを生み出す事が多いからなあ。すぐに思い出せるのは三つくらいかな。

まず「濡木痴夢男」だけど、新しいペンネームを作る必要に迫れて、喫茶店で手にした『内外タイムス』の紙上で適当に指差した五文字から作りました。ペンネームの由来なんて、こんなものですよ（笑）。翻訳物で使用した「ホー・ハンター」は、「飯田」を「はんだ」と読んで「ハンター」に置き換え、「豊一」の「豊」を「ホウ」に、「一」を長音記号にして「ホー」にしたんです。「曲二十八（まがり・にじゅうはち）」は、28歳の時に間借り生活していたから「間借り、二十八」で「曲二十八」というペンネームを使いました。一番新しいペンネームの「田端六六（たばた・ろくろく）」は住所です（笑）。〔東京都〕北区田端六の六。だから田端六六なのです。「第五回 北区内田康夫ミステリー文学賞」へ応募するために考えました<sup>33)</sup>。

\*\*\*

——この『おとなの絵本』という冊子をご存知ですか？

【飯田】ああ、『おとなの絵本』ね。これは、あまとりあ社の図書目録です。『あまとりあ』時代から久保社長と懇意だった——のかな、そういう話を久保書店に入ってから須磨さんに聞いた気がするけど——武野藤介の単行本を売るために作られた目録だそうです。

——なるほど。それで〔創刊号の〕表2に『武野藤介風流文学自選集』〔あまとりあ社より、1958年から1959年にかけて全8巻を刊行〕の広告が大々的に載っているのですね。

【飯田】『武野藤介風流文学自選集』なんて出してたんだ。新書判の単行本を何冊も出していたのは知ってたけど、自選集も出していたとはねえ（笑）。

——『おとなの絵本』は全部で5冊持っているのですが、第2集以降は表紙に「図書目録」と印字され、絵物語の再録やカレンダー掲載、グラビアも載っています。目録とは思えない立派な冊子ですね。

【飯田】[机の上にある『おとなの絵本』を手に取り]グラビアはカラーだ。贅沢だなあ。武野藤介の単行本は売れてたみたいだから、お金があったのかな(笑)。

——『おとなの絵本』は目録希望読者に送られたのでしょうか。それとも書店で販則品として配布されたのでしょうか。それと、この目録は全部で何冊発行されたかご存知だったら教えて下さい。

【飯田】僕が入社した頃には作っていなかったから、この目録については詳しい事を知らないのです。申し訳ない。

\*\*\*

——昭和40年代中期以降に発行された雑誌類、『SMキング』や『SMコマンド』などは集めていませんが、それでも安く売られていると買っているので何冊か持っています。その年代の雑誌で小妻要さんという方の挿絵を目にするのですが、この方の描く女子は肉感的で美しいですね。豊田みのるさんや中島喜美さんが描く女性とはひと味違った色っぽさがありますね。

【飯田】わかりますか。小妻さんはむっちりした女体を描く良い画家でした<sup>34)</sup>。特にお尻の曲線やスラッとした背中では色気がありました。彼も2、3年前に亡くなりましたね[2011年9月27日死去]。

小妻さんは若くて可愛い女の子がいると好色の気を出してねえ、やたらと尻を触ろうとしたり、しつこく話しかけたりするんですよ。僕が主宰する縛りの集まり[「緊美研」]へ何度か来てくれたんですが、そこでも参加者の女の子にちょっかいを出すんです。いつだったか、見るに見かねて「いい加減にして下さいよ、小妻さん。女の子が嫌がっているじゃありませんか」と怒鳴っちゃんだけど、「えへへ、ごめんね」みたいに軽い調子で謝られて拍子抜けしちゃったなあ(苦笑)。

——『裏窓』に挿絵を描いていた画家ですが、この機会に読み方を確認させて下さい。「小日向一夢」と「中島喜美」の正しい読み方を教えていただけますか。

【飯田】正しい読み方と言うと？

——前者は「小日向」を「こひなた」と読むのか、それとも「こびなた」と読むのか。どの号だったかメモを失くしてしまったので覚えていませんが、『裏窓』には木俣さん自身の手書き署名で「こひなた・かずむ」と書かれたルビが見られました。2009年に風俗資料館でお話を伺った際は「小日向一夢(こひなた・かずむ)は木俣清史さんのペンネーム」とお聞きしましたが、どちらの読み方が正しいのでしょうか。

【飯田】僕も須磨さんも「こひなた」って読んでいました。もしかしたら、木俣さんも読み方には拘ってなくて、その時その時で「こひなた」と「こびなた」を使い分けていたのかもしれませんが。須磨さんもそうでしたから(苦笑)。

——たまたま目についたのですが、ここ[『裏窓』1959年2月号]に「みのむらあきら・絵」とありますね。「美濃村晃」の読み方は「みのむら・こう」との事ですが、ここではひらがなで「あきら」と書かれています。

【飯田】名前の使い分けとか読み方とか、そのへん、須磨さんは大らかというか拘らない人だったなあ。1ヶ月に数えきれないくらい挿絵やカットを描き、小説やコラムを書いていたんだから仕方ないけど(苦笑)。

——中島さんのお名前ですが、これも風俗資料館では「なかじま・きよし」とお聞きしましたが、『「奇譚クラブ」の絵師たち』[130頁]では名前に「きみ」とルビが振ってありました。ここ『サスペンス・マガジン』1974年8月号を提示]に載っている一枚絵にも「kiyo」とサインがあります。  
**【飯田】**正しい読み方は「きよし」です。須磨さんと同じく日本画の勉強をしていた方で、もちろん男性です。河出の本『「奇譚クラブ」の絵師たち』のルビは僕ではなく編集部がつけたので「きみ」と素直に読んじゃったんだね。ただ、小日向さんの例もあるし、案外、中島さんも読み方は「きみ」でもいいと思っていたのかもしれないなあ。

\*\*\*

——『あまとりあ』が摘発された苦い経験から、久保さんは『裏窓』が摘発される事も警戒して、編集部に「こういう記事は書くな」とか、「こういう小説は載せるな」とか、編集方針に口出し——と言うと語弊がありますが——する事はあったのでしょうか？

**【飯田】**須磨さん時代はわかりませんが、僕が編集長の頃は久保さんが編集方針に口を出すような事はありませんでした。毎月、ちゃんと決まった日に雑誌ができあがってれば、経営者としては文句がなかったのでしょうか。

——読者層が限られた特殊な雑誌が10年近く継続したのは、やはり売れ行きがよかったからでしょうか。

**【飯田】**でしょうね。そうでなければ、経営者としての才覚が鋭かった久保さんが10年も雑誌発行を続ける筈ありませんから。

——内容が充実して厚さを増していった角背時代の『裏窓』は、どれくらい売れていたのですか？

**【飯田】**信じられないかもしれませんが、『裏窓』全盛期の実売部数は編集長だった須磨さんも知らなかったそうです。もちろん、僕も久保さんから『裏窓』の売れ行きや実売部数を教えてもらった事はありません<sup>35)</sup>。

——雑誌編集長には実売部数が通知されるものだと思っていましたが、須磨さんも飯田さんもお存知なかったとは驚きました。

**【飯田】**経営者からすれば「この雑誌は売れないから廃刊にする」と言う事はできても、「良く売れている雑誌だから今後も出し続ける」とは口に出す事は躊躇われたのでしょうかね。

——売れ行き良好とわかったら、編集費などのベースアップを要求されると思ったのかもしれないですね。

**【飯田】**そうだと思います。だから、久保さんは実売部数や売れ行きを教えてはくれなかったんだろうと今では思っています。ただ、特殊な雑誌だから一定数の読者はついていただろうし、あなたも言うように10年近く続いたんだから、それなりに売れてはいた筈です。実際、編集部員が書いた社内原稿にも原稿料を支払ってくれていましたから。無理矢理にでも『裏窓』の実売部数を聞いておけばよかったと後悔しています。

\*\*\*

——『裏窓』や『耽奇小説』の発行人になっている山田忠雄という方は、国文学者の山田忠雄と同一人物ですか？

**【飯田】**まさか(笑)。山田忠雄は久保書店の社員です。彼なんだけどねえ……これも沼正三とは別の意味で言いづらいというか、どこまで話していいのか難しい人なんですよ。

——この二人が別人だと確認できれば、深い追及は控えます。

【飯田】もう話しても問題ないだろうし、あなたからのインタビューでは知っている事を話すと約束したので、思いきって話しましょう。『裏窓』編集部の内情を知る人も少なくってきているし。

——ありがとうございます。それでは、差し支えない範囲で教えていただけますか。

【飯田】彼はねえ、ものすごい身障者だったんですよ。いつもビッコ引いて歩いてたし、手なんかも(手首を曲げて)こんなに曲がっててね。階段の上り下りは四つん這いでした。その姿が——申し訳ない言い方だけど——蜘蛛みたいだったのを今でもハッキリと覚えています。

——発行人になっているという事は、山田さんと久保社長は親戚か知り合いだったのでしょうか。

【飯田】発行人と言っても名目だけで、実際は編集補助というか雑用をやっていたみたいです。それから、彼は久保〔藤吉〕さんの縁故者でも知り合いでもありません。赤の他人です。山田さんが発行人として編集部に在籍していた理由はですね、摘発対策だったんです。

——摘発と言いますと？

【飯田】世間一般の人からすれば、『裏窓』は得体の知れないエロ雑誌なわけです。こういう雑誌は、いつ、どういう理由で警察の摘発を受けるかわからなかった。

——そういえば、『あまとりあ』も摘発されていますね。

【飯田】『あまとりあ』は性科学啓蒙という建前があったけど、『裏窓』には一般の人が目にしたら眉をひそめそうな小説や挿絵が多いから、摘発されても言い訳できない。そこで久保さんは、障害者を発行人にすれば摘発されても刑事の同情を引き、厳しく問いただされる事もないだろうと考えたようです。

——なるほど。確かにデリケートな話題ですね。

【飯田】久保書店は現存するし、裏話を暴露するようで心苦しいけど、『裏窓』や『耽奇小説』の編集者——須磨さんや島本さん——が亡くなった今、僕しか証言できない話ですから。あなたのように『裏窓』や『サスペンス・マガジン』を研究している人が現れなければ話す機会はありませんでしたし、僕自身も話そうとは思いませんでした。

——『かっぱ』は創刊号〔1月号〕から3月号まで持っていますが、奥付の編集人として久保〔藤吉〕さんの名前がクレジットされています。久保さんは編集業務もされていたのでしょうか。

【飯田】僕が知る限り、久保さんは印刷や製本についてはプロフェッショナルだったけど、編集業務については詳しくなかったですね。僕が『裏窓』編集長になってからも、見本ができた時にパラパラと中身を捲ってみるだけでした。社内旅行の時も、久保さんは「俺は編集者ではなく印刷・製本屋の親父だから、雑誌編集は君たちに任せるよ。これからもいい本を作ってくれ」みたいな事を言っていました。『かっぱ』も実際の編集長は高橋鐵か雅久さんじゃないのかな。

——光文社からの注意で『かっぱ』を『裏窓』へ変更したそうですが、改題誌名が『裏窓』に決まった理由はご存知ですか。

【飯田】ヒッチコックの映画『裏窓』が由来です。須磨さんは「世間とは違う視点から世の中を覗く裏窓みたいな雑誌にしたかったから」って言ってたけど、後に作り話だとわかりました(笑)。自分が好きなヒッチコック映画の「裏窓」から採ったんだそうです。

——『裏窓』は1960年10月号から誌面リニューアルとして中綴じ製本になりましたが、実際は従来の平綴じ製本よりも製本経費が安いから変更したのでしょうか。10月号という中途半端な



時期の唐突なりニューアルが気になっているのですが……。

【飯田】 う～ん、これは須磨さんが決めた事だからなあ、実際はどうだったんだろう。考えられるとしたら、あなたが言うように平綴じ製本の方が安いから変更するよう久保さんから言われたのかもしれない<sup>36)</sup>。

——個人的には平綴じ時代の頃は文藝雑誌らしく、堂[昌一]さんの表紙絵も好きだったので、あの造本が続いてほしかったです。

【飯田】 僕も同感です。グラビアになってからは味気なさを感じましたし、週刊誌みたいな安っぽさの中綴じ製本は好きじゃなかった。

[(追記) 後日、飯田氏から譲り受けた『裏窓』1960年5月号に面白い発見がありました。表4(裏表紙)に記されている巻号表記の巻数が、本来は「5巻」と記すべきところを「4巻」と誤記しており、鉛筆で「4」の部分に×印がついていました。古書店で購入した『裏窓』同号には×印がなく、おそらく、飯田氏へ本を献本した須磨氏がつけたものと思われます。]

——1965年に『裏窓』は『サスペンス・マガジン』へ巻号数をリセットしたうえで誌名変更していますが、その経緯について教えていただけますか。

【飯田】 理由は簡単ですよ。これも摘発対策です。1963年から1964年にかけて『裏窓』は世間の“良識団体”から糾弾され、非難の電話や投書も毎日のようにありました。その頃は全国各地に白ポストというものが設置されていて、悪書と見なされた本は雑誌であろうと単行本であろうと投函される、悪書追放運動が加熱していた時期だったのです。目障りに思う本を駆逐するため、お金を払ってまで糾弾すべき“悪書”を自称有識者が購入する姿は考えるだけで可笑しいけど、当時は笑っている場合じゃありませんでした。おかげで『裏窓』編集部は社内で肩身の狭い思いをさせられましたよ。1964年になると編集方針が事なかれ主義というか、編集長の僕自身「こんな誌面でいいのなかあ」と思うくらい大人しくなって、ちょっとでも糾弾対象となりそうな場面がある小説は基本的に掲載を見送っていたんです。話は脱線しますが、自分たちの思うような誌面作りができない鬱憤をはらすため、その頃、僕と須磨さんで『裏窓』っていう同人誌みたいな本を作りました<sup>37)</sup>。

——『裏窓』ですか。見た事ありません。どのような雑誌か興味があります。

【飯田】 同人誌だし、配布先も限られていたから、あなたが見た事ないのも当然です。数冊しか作らなかったから古書店にも出た事がないんじゃないかな、須磨さんが売ってなければ(笑)。冗談はともかく、現物が見つかったら差しあげますよ。そうだ、『サスペンス・マガジン』とか『裏窓』も全号ではないけど手許に残っているから、近いうちにお送りしますね。

——ありがとうございます。

【飯田】 そうそう、『サスペンス・マガジン』の話でしたね。1964年のお盆前だったかな、久保さんから「悪書として『裏窓』が目をつけられているようだけど、どうにかならんもんかね」と言われ、僕と須磨さんは蒸し暑い編集部で汗だくになりながら話し合ったのを覚えています。知恵を絞った末、「雑誌名を『サスペンス・マガジン』に改題し、推理小説を少し混ぜ込んで推理小説専門誌のようにカムフラージュしよう」というアイデアが出ました。『裏窓』との差別化をアピールするため、製本も旧来の角背に戻しました。僕は『探偵倶楽部』という雑誌に寄稿していたから、なんとなく探偵雑誌の内容を知っており、このアイデアを出したんです。1960～61年頃の『探偵倶楽部』は純粋な推理小説だけでなく、犯罪実話やエロチック読物なんかも載っていたので参考になりました。

——そんな経緯があったのですか。

【飯田】今だから気軽に話せますが、『裏窓』らしさを残しつつ、推理小説雑誌を装うのは大変でした。一応、『裏窓』の後継誌である事をわかり易くするため、島本さんの長編『鬼姫変幻帖』。現題「六姫無残絵巻」の連載を『裏窓』1965年1月号から始め、それを『サスペンス・マガジン』[1965年2月]創刊号に継続させました。

——創刊間もない『サスペンス・マガジン』には、山田風太郎、山村正夫、大藪春彦、飛鳥高など著名作家の名前が目次に載っていますね。いずれも再録作品ですが、これだけの方々から再録許可を貰うには苦労したのではないですか。

【飯田】当時の須磨さんは、伝手を頼って毎日のように作家宅を訪問していた。編集部には午前中に顔を出し、手早く作業を済ませたら午後は外出直帰という日が続いていたなあ。なにしろリニューアル新創刊までの時間が短かったから。久保さんの口調からだとな年内[1964年]に廃刊しそうな様子でしたから、須磨さんも焦っていたんじゃないかな。

——作品再録を打診した作家は何名くらいいたのでしょうか。

【飯田】さあ、どれくらいの人に声かけしたんだろう。そのあたりの対応は須磨さんが一人で頑張ってくれたので、僕は知らないのです。ただ、山村正夫さんはご自身もセクシャルな作品を書いているせいか「いいですよ」と即答し、「この短編なんてどうです」と作品まで選定してくれたそうです。提供されたのは「断頭台」と「暴君ネロ」で、どちらもエロティシズムの要素が少なく、その辺りも山村さんは考えて下さったようです。

——再録を断る作家もいたのでしょうか？

【飯田】三好徹さんには「申し訳ありません。お断りします」と拒否されたそうです。雑誌名を略すと『SM』になるし、久保書店の雑誌という事で躊躇したんですかね（苦笑）。当時は“久保書店＝悪名高いエロ雑誌のあまとりあ社”という偏見もあったから、三好さんは断られたんだと思います。

——三好さんの他にも作品再録を断る作家はいましたか？

【飯田】僕が知っているのは三好さんだけです。須磨さんも手当たり次第に声がけしたわけじゃなかったろうし、ある程度の勝算を持って打診していたと思うので、そんなに断られはしなかったんじゃないですかね。

——久保書店＝あまとりあ社といえば高橋鐵の名前は外せませんが、飯田さんは高橋鐵と会った事がありますか？

【飯田】はい、あります。あなただから打ち明けますが、僕はねえ、高橋鐵が大っ嫌いなんです。大ボラ吹きで自己顕示欲が強くって。あんな俗物な男は見た事がありません。久保さんに会いにきたのか、僕も社内で高橋鐵の姿を何度か見かけましたが、その時も態度が始終偉そうで「なんだ、このおっさん」って思っていました（笑）。

——高橋鐵は賞讃する人と毛嫌いする人にと二分されると聞いた事がありますが、そこまでは（苦笑）。

【飯田】1961年度の社内旅行<sup>38)</sup>には高橋鐵が来賓扱いで参加すると聞いたので、僕は欠席するつもりだったんです。でも、須磨さんから「入社初年度の旅行なんだし、彼の事は彼の事でほっとけばいいじゃない。旅行を楽しみましょうよ」と飲み屋で言われて、仕方なく社内旅行へ参加したんです。ところがねえ、高橋鐵はバスの中でひたすら自分語りをする。もう演説だね、ああなると。「今の皇太子[2021年5月14日現在の上皇]に新婚初夜の所作を伝授したのは自分である」とか『あまとりあ』は日本が誇る最高の性科学雑誌だった、「僕の書いた『あるす・あまとりあ』は『完全なる

結婚』[テオドール・ファン・デ・フェルデの著書。原書刊行は1926年。結婚生活における性生活の手引書として世界中でベストセラーになった]を上回る大傑作だ」なんて事を大きな声で捲し立てるわけ。得意がる高橋鐵の事を、旧知の雅久さんや社長の久保さんが「いよッ、高橋鐵。日本一い」とか「高橋先生、バンザイ」なんて具合におだてるもんだから、あの男はさらに調子づいてねえ、自慢話がどんどんヒートアップしていくの<sup>39)</sup>。まあ、ほとんどが『あまとりあ』に関連づけた思い出話とか自慢だけだね。

——どんな話をされたのですか。

【飯田】「僕と久保さん、中田君による『あまとりあ』は戦後類を見ない大ベストセラーになった。この雑誌は、あまとりあ社を大いに繁栄させ、僕も家を建てる事ができた。『マンハント』や『裏窓』も後世に名を残す立派な雑誌になってほしい」とか、「『あまとりあ』の創刊後、いかに自分が性科学について無知だったかを知った大勢の人が我が家にやってくるので行列が絶えない日はなかった。あまり有名になるのも考えものだよ」とか、下世話な自慢話です。こんな話を延々と聞かされてご覧なさい。うんざりするのを通り越して気分が悪くなります。

——しかも社内旅行のバス内ですからね（苦笑）。

【飯田】高橋鐵の演説は聞いてて本当に苦痛でした。「こんな旅行に誘って」と最後尾の席に座っている須磨さんを睨みつけたんですが、須磨さんは須磨さんで眼を閉じながら別の事を考えていたようです（笑）。

——須磨さんは高橋鐵の事をどう思っていたのでしょうか。嫌っていたと言うか、苦手意識があったりしたのでしょうか。

【飯田】須磨さんは紳士だったので快く思わない部分があっても言葉や態度には出さない人でしたから高橋鐵にも笑顔で接していましたが、内心では苦手に思っていたんじゃないかな。性科学の第一人者を自負する偉そうな態度や学者ぶった態度にイラッとした事が何度もあったと思いますよ（苦笑）。

——私事で恐縮ですが、ようやく「裏窓叢書」全冊[1959～1965年にかけて全10集を発行]の初版本が揃いました。まだ読んでいない巻もありますが、万里小路崑の『残酷裸女絵』や九十九郎の『悪魔術の塔』なんかは『裏窓』へ一挙掲載されても違和感ない作品でした。以前にもお尋ねしていますが、再確認として同じ質問をさせて下さい。この叢書を企画されたのは須磨さんに間違いありませんか？

【飯田】間違いありません。装丁も須磨さんです。書下ろし長編をウリにして企画したけど書き手が足らず、須磨さんからの依頼で僕が10冊のうち3冊を書きました。第1集『狂異地獄肌』[飯田豊吉・名義]、第3集『地底の牢獄』[藤見郁・名義]、第6集『地獄谷の女たち』[塔婆十郎・名義]です。この叢書に複数作書いたのは、僕と万里小路さんだけです<sup>40)</sup>。

——須磨さん自身、小説を書く気はあったのでしょうか？

【飯田】なかったと思います。自分でも小説を書くつもりがあれば、僕に3冊分も書くように依頼してきませんから。忙しくて新作の長篇小説を書く時間的余裕がなかったんじゃないかなあ。

——万里小路崑と潮一樹が同一人物である事は以前にも伺っていますので、そうしますと残る四人は各1作の新作書下ろしだったわけですね。

【飯田】そうです。

——花巻京太郎が団鬼六氏、九十九郎が千草忠夫氏の別名なので、お二人については略歴

などがわかりますが、南郷京助氏と黒木忍氏はどういう方なのでしょうか。二人とも投稿作家である事は以前に伺っていますが、この機会に改めてお話しいただけますか。

【飯田】黒木さんは須磨さんの知り合いで大坂在住の方でした。僕も会った事があります。いつだったか黒木さんが上京された際、彼と須磨さんと僕の三人で渋谷へ鍋料理——すき焼きだったかな——を食べに行ったんですが、割下に混ぜる溶き卵を作ろうと小鉢に卵を割った時、卵の白身に血が混じっているのを見て「やだあ、気持ち悪い。血が入ってるう」と言っていたのを覚えています。

——黒木さんは女性だったのですか？

【飯田】いえ、男性です。体をくねくねさせながら「気持ち悪い」と言う姿が妙に女性っぽかったので、失礼だけど「妙な人だな」と思いました（笑）。彼は創刊して間もない頃から『裏窓』へ投稿していたようだけど、どれくらい書いていたのかな。いつの間にか名前を見なくなっちゃったんだよねえ。

——私の調べた限りでは『裏窓』に短編 11 作と絵物語 1 編が載っていました。1957 年と 1958 年に各 2 作、1959 年に「まぼろし侍破魔暦」シリーズ全 7 作と絵物語「非人大名」[1959 年 12 月号掲載] を書いています。1960 年以降は黒木名義で『裏窓』へは作品を発表していないので、同じ年に「裏窓叢書」へ長編「黒蛇呪縛」を書下ろして筆を折ったのだと思われます。これは私が 2011 年に作った黒木氏の作品一覧です。『裏窓』が全号揃ってからアップデートをしていないので、もしかしたら完全ではないかもしれませんが。

【飯田】へえ、よく調べてますねえ。これは全部、時代小説ですか？

——いえ、第 1 作の「宝石呪縛」[1957 年 11 月号掲載] は現代物のスリラーです。

【飯田】あなたが『裏窓』について研究している事は知っていましたが、こんなに細かい作家別リストまで作っていたとは驚きました。

——南郷京助というペンネームの名付け親は飯田さんだと伺っていますが、「東映の南郷京之助という役者から名前を借りた」という事で間違いなかったでしょうか。

【飯田】はい。間違いありません。

——南郷さんの作品は中世ヨーロッパを舞台にした作品が多いですが、臨場感ある拷問場面や責め場の挿絵は中川彩子 [藤野一友] さんの絵がピッタリですね。

【飯田】そうですね。あなたもそう思いますか。銅版画みたいな藤野 [一友] さんの絵は南郷さんの小説と相性が良かったです。須磨さんも南郷さんの作品には藤野さんの挿絵が似合うと思ったのか、南郷さんから原稿が届くと藤野さんに挿絵の依頼をしていました。

——叢書についての話に戻りますが、「裏窓叢書」は全 10 冊あり、企画と装丁は須磨利之さんが担当された。実際の作者は飯田さん、黒木さん、万里小路さん、団さん、南郷さん、千草さんの 6 人という事ですね。

【飯田】そうです。付け加えると、舞台が日本の場合は千代紙を、海外の場合は城壁のレンガを、それぞれイメージしたカバーデザインにしたそうです。

——角背の上製本なので全冊揃えて本棚に収めると「叢書」らしい見栄えがしますし、黒背のデザインも上品です。

〔追記〕私がコーディネーターとなって、2013 年 5 月 11 日に論創社内で行なわれたインタビュー終了後、帰宅される飯田氏をタクシーでお送りする際、東京都北区田端の事務所へお邪魔しました。そこで「裏窓叢書」の第 1 巻と第 2 巻を頂戴しましたが、どちらも並製の異装本 [上製本と初版発行年月日は同一] でした。どういう理由で、何冊ま

で並製本が発売されたかは、飯田氏もご存知なかったそうです。]

**【飯田】** 僕からも個人的な話になるけど、最後に一つ、いいですか。

——はい。

**【飯田】** あまとりあ社の新書は須磨さんが装丁を担当した本がたくさんありましてね、これ [『酔筆随筆集 風流乗りあいバス』1956年・刊] もそうです。いつだったかは思い出せないけど、この本は江古田 [の久保書店] へ原稿を持っていたとき、須磨さんから貰ったんです。収録されている随筆は『あまとりあ』あたりの寄せ集めに思えるのですが、僕は『あまとりあ』を2、3冊しか持っていないので確認できません。少なくとも『奇譚クラブ』に載ったものではないみたいだけど、あなたはどう思われますか（本を黒田へ手渡す）。

——拝見します。（本をめくりながら）レイアウトや作家陣からの推察ですが、おそらく『笑の泉』や『かっぱ』に載ったエッセイを編纂したものではないですかね。作家名は知っていても、ここに収録されているエッセイを『あまとりあ』で目にした覚えはありません。

**【飯田】** 『かっぱ』と『笑の泉』か。あり得るね。いや、ありがとう。

——この本に載っているエッセイの初出は私も気になります。

**【飯田】** 須磨さん、島本さん、雅久さん、久保さん、小妻さん、木俣さん、中島さん、陽ちゃん。みなさん、もう亡くなってしまったけど、彼らとの交流や一緒に仕事をした事は僕の大事な財産になっています。当時は変態雑誌と嘲られ、今では見向きもされない『裏窓』や『サスペンス・マガジン』を研究、再評価してくれる人に出会えて本当に嬉しいですよ。あなたと知り合えて、僕も忘れかけていた事を次々と思い出しました。感謝します。

——こちらこそ、当事者しか知らない貴重なお話をたくさん聞かせていただき、感謝しています。

**【飯田】** 須磨さんの評伝だけでなく、僕が久保書店を辞めた後の話も書きたいけど、僕も年齢だし、書きたい事は山ほどあるのに体力が追いつかなくてねえ。これらを書く前にポックリ逝っちゃうかなあ……。

## 注

- 1) 『別冊 SM ファン』掲載の豊幹一郎名義の商業緊縛グラビア批判、『SM ネット』連載における類似の批判等を参照されたい。
- 2) 河原梓水「カストリ雑誌時代の『奇譚クラブ』」（石川巧編『カストリ雑誌総攬』勉誠出版、近日刊行）
- 3) 辻村隆は、早期から『奇譚クラブ』に寄稿していた人物であり、『奇譚クラブ』の緊縛グラビアの制作に関与し、後に「SM カメラハント」という人気シリーズを長期にわたって連載、雑誌を支えた。
- 4) 飯田は『あまとりあ』をほとんど所持していなかったようなので、須磨の寄稿を実際に知らなかった可能性もある。
- 5) 『ラ・ヴィ・パリジェンヌ』の詳細については（荒俣1998）を参照されたい。
- 6) 例えば、<仕事メモ1959/12注>には、「黄色オラミ誕生」は沼正三の「家畜人ヤプー」に刺激されて書いたものであるとの記載があるが、「オラミ」と「ヤプー」は1956年12月号で同時に連載がスタートした。
- 7) 1957年3月、御幸染工株式会社、株式会社旭一トレーディングを吸収合併し、旭一シャイン工業株式会社に社名変更。
- 8) 風俗資料館に所蔵されている『シャインニュース』は1956年9月25日発行の10月号からであるが、本号に飯田の名は確認できない。
- 9) 『KK通信』19号（1954年4月）13頁。「魔性の姉妹」以外の抵触部分は、岡田咲子「謎の女と私」113

- 頁上段7行目より下段8行目、亀岡紘一郎「星は濡れている」179頁下段10行目より180頁上段2行目、岸本幸雄「我が少年時代の犯罪」184頁上段5行目より中断8行目。
- 10) 『シャインニュース』1956年10月号記載より。
  - 11) 司書房発行。『SMセレクト』を刊行していた東京三世社から独立した石川精亨のもと、1971年12月1日創刊。
  - 12) 奥付によれば、本号で『小説SMセレクト』は終刊し、後継誌として『告白SMサロン』を予定しているとあり、これにともない連載が終了したと思われる。しかし、翌月号はリニューアルされたものの『小説SMセレクト』として刊行され、『告白SMサロン』は刊行された形跡がない。類似雑誌としては『SMセレクト』増刊号として『告白S&Mセレクト』が1987年9月に刊行されている。リニューアルされた『小説SMセレクト』の体裁は『告白S&Mセレクト』と全く同じ。
  - 13) 本作はアートビデオ・作品番号1017『背徳の誘惑』と思われるが、こちらは女優名「白川真弓・木下由紀」となっている。
  - 14) 『裏窓』1957年12月号、136-144頁。1957年発行の『裏窓』に飯田らしき寄稿作品はなく、事実と考えてよい。
  - 15) 1961年09月20日<仕事メモ>。
  - 16) 作家が編集部へ原稿を持参すること自体は当時決して珍しくなかったようである。中田雅久はマンハントの編集時代、「原稿は、催促したり取りに行ったりすることはほとんどなかったんじゃないか」、「編集部に来るのが面白いもんだから、遊びに来るんですね」、「みんな、編集部へ来てバカ話ばかりしてた」と述べている（中田2008）。
  - 17) 黒田氏から原稿をご提供いただき、確認したが、残念ながらこれまでにすでに語られている内容であるとともに、事実関係の誤りがかなり目につき、公開するには及ばないと判断した。
  - 18) 株式会社虻プロダクション。
  - 19) 『あぶめんと』誌上には「あぶの一まる・すてーとめんと」の語を確認することはできない。
  - 20) 『SMコマンド』創刊号にて編集長が荘徹也であることを確認済。
  - 21) (飯田2013:112頁)に同様の証言がある。
  - 22) 飯田は入社時に、社内原稿に原稿料を支払う事、他社の雑誌への寄稿は自由に行ってよいこと等々の条件を久保藤吉氏に提示したが、すべて認められたという<仕事メモ1961/10注>
  - 23) 『耽奇小説』刊行時期は、飯田の語る悪書追放運動による弾圧が厳しかった時期に当たるため、責めシーンの削除は摘発対策とも考えられる。
  - 24) 杉山の『奇譚クラブ』初出は1948年3月号(通巻5号)「パンパンガール殺人事件」。
  - 25) 中田が語る経緯は以下。「氏家富良さんという編集責任者が須磨利之氏を呼んだんだと思うんです。で、出てきたんですよ、京都から東京へ。でも、夜久さんとこの仕事(河原注:『風俗草紙』編集のこと)だけじゃ生活が心細い。で、うちの社長の久保さんは小出版社同士として夜久さんにつき合いがあったから、久保書店でもSM雑誌を出すことにして須磨さんを編集長に据えた。それで『裏窓』が出るわけです」(中田2008:17頁)。
  - 26) 『SMマガジン』はコバルト社刊行のSM雑誌であり、創刊当初は『サスペンス・ミステリー・マガジン』。これを先行する久保書店『サスペンス・マガジン』の「パクリ雑誌」だとして、飯田は様々な媒体で強く批判している。<仕事メモ>を見ても、『SMマガジン』はもとより、その後コバルト社が刊行したSM雑誌との仕事は一切記載されておらず、犬猿ぶりがうかがえる。そのため、同じく『サスペンス・マガジン』を編集していた島本が『SMマガジン』に寄稿していた事実は興味深い。
  - 27) 『奇譚クラブ』1953年12月号掲載の「映画に現れた猿轡」がおそらく初出。本作には、鳴山自身による達者な挿画が6枚掲載されている。同1955年3月号掲載の鳴山「縛り絵を描いて」に、彼が縛り絵の愛好者で、自身でも描くようになった経緯が記されているが、年齢やそれに付随する経歴に虚偽が含まれている。
  - 28) 『奇譚クラブ』で活動していた1950～1960年代の沼正三は倉田卓次と断定して差し支えない(河原2019)。『奇譚クラブ』を10年ほど通覧すれば、現在沼正三とされる天野哲夫は、同時期に活動していた沼とは全く別の作家であることは明らかであり、両者が別人であることに疑念の余地はない。正確な時期

- は不明であるが、後年倉田は天野に沼正三としての権利をすべて譲り（黒田氏追記参照）、その後天野は沼として活動し始めたために、混同が起こっているが、それは早くとも1970年代のことであり、『奇譚クラブ』での活動にさかのぼることはない。1980年代後半以降の沼名義の活動は天野哲夫によるもので、「家畜人ヤプー」の後半は天野の手によるもの。1970年前後の沼の著作（『ある夢想家の手帖から』・『家畜人ヤプー』単行本掲載の書き下ろし部分等）はおそらく倉田筆だと思われるが、確実ではない。現在入手しやすい『家畜人ヤプー』諸本（ミリオン出版版、太田出版版、幻冬舎版）には天野執筆部分が含まれることに注意されたい。倉田のオリジナル版は、『奇譚クラブ』本誌および、1970年刊行の都市出版社版で読むことができる。一読をお勧めする。
- 29) 吾妻新の著作リストは（河原2016）に示したので参照されたい。吾妻は1953～61年の間に、エッセイ23本、絵物語1本、翻訳2本（連載）、長編小説2本（連載）を『奇譚クラブ』および『KK通信』に寄稿している。
- 30) 『奇譚クラブ』1959年3月号初掲載。同年5月～12月号まで連載された。
- 31) 須磨のイラストは『奇譚クラブ』1953年6月号まで掲載されており、その1～2ヶ月前に曙書房を退社したと考えられる。その後須磨は東京へ引越し、1953年7月『風俗草紙』（日本特集出版社）を創刊、1955年には久保書店刊行の『あまとりあ』の編集に関わるとともに、『かっぱ』（後の『裏窓』）を創刊と、『奇譚クラブ』のライバル誌を次々と東京で編集していた。そのため、須磨がこの時期『奇譚クラブ』の編集を手伝っていたとはにはわかには信じがたい。吾妻の初寄稿は1953年3月号であり、須磨の曙書房勤務時期とわずかに重なっているため、退社以前に知ったと考えるのが穏当であろう。
- 32) 坂本の名は<吉田→飯田1970/09/29?>にも登場し、坂本名義の活動も『あまとりあ』に見出せることから、松井=坂本は事実である可能性が高い。『あまとりあ』では嘉枝とも表記されている（1955年8月終刊号）。坂本の作家活動については（黒田2020）もあわせて参照されたい。
- 33) 田端名義の「天狗のいたずら」はこのとき大賞を受賞。
- 34) （マスターK2013）に小妻の簡単な評伝があり、小妻のタトゥーデザイナーとしての活動にも触れている。本書は本インタビューであわせて言及されている小日向一夢・堂昌一（春日章）にも触れている。
- 35) 『裏窓』の販売部数については（飯田2013:82頁）に「数万部」程度だっただろうという推測がある。
- 36) （飯田2013）および<仕事メモ1960/10>では、リニューアルは台頭してきた『風俗奇譚』への対抗策だったと述べられている。
- 37) 『裏窓』は<ぬれしん>、（濡木2003:242頁）等にも登場するため実在したと思われるが、現物は未確認。
- 38) <仕事メモ1961/06>にみえる「久保書店たのしみ会旅行」のことか（6月14～15日）。片山橋から観光バスで出発し、「高崎観音→伊香保→榛名湖→新宿ミュージックホール」というルートが記されている。だとすれば、この旅行は入社前のものとなる。しかし、（飯田2013）によれば、久保書店の旅行は『あまとりあ』刊行時から毎年行われていたとのことなので、この年のものとは限らないかもしれない。
- 39) （中田2008）によれば、中田が久保書店に入社し『あまとりあ』の編集者となったのは、高橋のスカウトだったという。高橋と親密だった背景にはこのような事情も影響していたかもしれない。
- 40) 「裏窓叢書」については、（飯田2001,2013）においてもほぼ同様のことが述べられている。（飯田2001）では飯田は叢書10冊のうち7冊を書き下ろしたと述べているが、（飯田2013）では本インタビューと同じく3冊としている。

### 《参考文献》

- 荒俣宏『20世紀雑誌の黄金時代』（平凡社、1998）
- 飯田豊一『「奇譚クラブ」から「裏窓」へ 出版人に聞く⑫』（論創社、2013）
- 河原梓水「村上信彦の『奇譚クラブ』における匿名テキストを解読する—戦後の民主的平等論者の分身について—」（『立命館文学』第647号、2016）
- 河原梓水「マゾヒズムと戦後のナショナリズム—沼正三「家畜人ヤプー」をめぐる—」（坪井秀人編『戦後日本文化再考』、三人社、2019）
- 黒田明「続・探偵作家の足跡」（『新青年』趣味』20、2020）

- 仙田弘『総天然色の夢』（本の雑誌社、2000）
- 田中雅一「縛りから Shibari へ」（佐藤知久、比嘉夏子、梶丸岳編『世界の手触り フィールド哲学入門』ナカニシヤ出版、2015）
- 辻村隆「サロン楽我記」（『奇譚クラブ』1970年1月号）
- 都築響一「濡木痴夢男」（同著『珍日本超老伝』筑摩書房、2011）
- 中田雅久・新保博久「『新青年』から『マンハント』へ——中田雅久インタビュー」（『本の雑誌』303、2008）
- 中原るつ「物語性のある緊縛写真～同人『ともしび』のこと」、ともしび写真集・1『夕日の部屋』、<http://pl-fs.kir.jp/nureki/tomoshihi/01/index.htm>、（参照 2021/05/05）、風俗資料館、<http://pl-fs.kir.jp/pc/index.html>、（初出、『マニア倶楽部』276号、2012年3月号）
- 中原るつ「解説 濡木痴夢男のもう一つの顔——猛烈執筆人生」（濡木痴夢男『緊縛★命あるかぎり』河出書房新社、2008）
- 濡木痴夢男「緊美研・創立当初のこと」（『緊美研通信』1号、1989）
- 濡木痴夢男「欲望と快楽——緊縛エロティシズム考（八）「裏窓叢書」について」（『月光』18、2000）
- 濡木痴夢男「高倉一氏との出会い」（『S & M スナイパー』、2005年1月号）
- 濡木痴夢男「第21回 縄師を名乗る気持ち」、2007年11月16日、<http://pl-fs.kir.jp/nureki/sibai/21/index.htm>、「濡木痴夢男のおしゃべり芝居」、<http://pl-fs.kir.jp/nureki/sibai/01/index.htm>（参照 2021/04/15）
- マスター K 著、山本規雄訳『緊縛の文化史』（すいれん舎、2013）
- 龍「La Vie Parisienne と 奇譚クラブ の表紙比較」（2013/07/02）、龍の巣、<http://ryunosumika.blog.fc2.com/blog-entry-29.html>（参照 2021/04/12）
- 龍「奇譚クラブ（雑誌）一覧」（2013/05/27）、龍の巣、<http://ryunosumika.blog.fc2.com/blog-entry-1.html>（参照 2021/04/12）

（福岡女子大学国際文理学部講師）